

「賢くん、今夜も一緒に居たい」

「祐子、俺だって一緒に居たいさ。だけどそうしたら、もう俺たち離れられなくなっちゃうぞ」

祐子は引き出しを閉めずに、手を掛けたままでいた。

「わたし、苦しいの。あなたと一緒に居ないとだめなの。お願いだから、今日も一緒に居て」

「祐子、このアパートの合鍵持っていないか？」

「あるけど、どうして？」

「俺に1日貸してくれないか？そうしたら、今日はここに居るよ」

「そうだ、何故気がつかなかったのかしら、一寸待っていて」

祐子はパタッとテーブルの引き出しを押して閉め、ライティングデスクの処に行って、引き出しから合鍵を出して来て賢に渡した。

「この鍵ずっと持っていて。いつでもここに来て。わたしシャワーを浴びて来る」

祐子は着替えを持ってバスルームに向かった。祐子のアパートのバスルームは、浴槽と便器のある部屋と、洗濯もできる化粧室とが分かれていて、そこで脱衣ができるようになっていた。祐子はシャワーを浴びると、パジャマに着替えて出て来て、そのままベッドにどっと身を投げた。

「賢くん、汗流すといいわよ」

「うん・・・」

賢は簡単にシャワーを浴びると、腰にタオルを巻きつけたまま戻って来てベッドに上がった。ふたりは口づけを交わすと、激しく求め合った。

「大好き」

「祐子、俺たち、情愛の部屋に幽閉されてしまったみたいだな。暫くはここから出て行けそうもない」

「わたし、知らないうちに、おとといのあの一体感と恍惚感を求めてしまうの」

「祐子、おれはもっと広大な愛の世界に入ってゆきたい。すべての存在を愛せるようになりたい」

「わたしはあなただけでいいわ。あなたといつでも一つでいたい」

「俺たちいつか、肉体を超えて融合することができるようになるといいな。それは肉体の結合から入るのがもっとも近道のように見えるけど、だけど快樂だけじゃだめだ。それを超えたところに海のように大きな喜びにあふれた愛の世界があると思うんだ。またいつかふたりで挑んでみよう。俺がこれを実現できる相手は祐子しかいないから」

やがて、祐子が自然に眠りに落ちた。賢はそっと起きあがり、祐子の体にシーツを掛けた。脱ぎ捨ててあった衣類を身に着けると、テーブルの上にメモを残した。

「疲れているだろう。今日はゆっくり休むといいよ。明日の夕方俺のアパートに来いよ」

靴を手にして部屋の明りを消すと、ドアに鍵を掛けて祐子のアパートを出た。夏の夜風は心地良かった。重い脚を引き摺る様に歩いていると睡魔が襲って来た。賢は体内に生気を吹き込み、一步一步に意識を集中して歩いた。時計は12時を回っていた。アパートの近くに来たとき、背後から数馬の声がした。

「おい、賢、遅いじゃないか！」

「やあ、数馬か、今戻ったのか？」

「うん。いま、そこで飯を食って来たんだ。結構ハードだったよ。明日も早朝出社してミーティングさ」

「そうか、大変だな。交渉はうまくいったのか」

「ああ、何とか契約にまで漕ぎ着けたよ。だけど、いろいろ制約条件があって、社内の調整が大変だ」

「それはご苦労だな。じゃおやすみ」

「おやすみ」

ふたりはアパートの賢の部屋の前で分かれた。数馬の部屋は同じ2階の

奥の突き当たりにある。賢は部屋に入ると、鞆を投げ出した。心地よい疲れを感じながら、そのままベッドに潜り、祐子の姿を思い描きながら深い眠りに落ちた。

翌朝、祐子は目覚めると賢を探したが、姿が見えない。「やはり、帰ってしまったのか」と思った。不思議に冷静な自分に驚いた。朝の身繕いをし、簡単に食事をするためバターを冷蔵庫から取り出し、トーストを焼いてテーブルの上に置こうとしたとき、賢からのメモに気付いた。賢の優しさが伝わってきた。少し目頭が熱くなるのを感じ、やはり自分は賢を愛していると思った。

その日の午後、祐子から賢の職場に電話が掛かった。電話には榎田が出た。

「株式会社WE C 営業第2課の榎田でございます」

「榎田さんですか？わたしは昨日お目にかかった崎野です。内観さんはいらっしゃいますでしょうか？」

「祐子さん、榎田です。昨日は失礼しました。内観は唯今外出しております。何かご伝言がございましたら、お伺い致しますが」

榎田は意識的に定型の応答をした。

「いえ、それではまた後で掛け直します」

「あっ、もしもし、昨日あなたにお会いして、是非一度、食事をご一緒させて頂けないかと思ひまして」

「えっ？ はい、でもまだお会いしたばかりですので。もし、機会がありましたら。では失礼します」

祐子の素っ気ない応答に榎田は少し失望した。暫くすると賢が外出から戻った。榎田は賢の姿を見ると小走りで駆け寄って来て言った。

「先輩、さっき祐子さんから電話がありました。また後で電話するっておっしゃってましたが」

「ありがとう」

賢は直ぐに祐子の携帯に電話した。

「もしもし、祐子？」

「もしもし、ちょっと待ってください」

祐子はオフィスを出て、人を避け、廊下の端で話した。

「賢くん、すごいわよ。亮子から電話があったの。今日も会社休んで病院で再検査を受けていたようだけど、それが、良くなってきてるんだって。昨日から今日にかけて急に好転したので、先生びっくりしているらしいの。亮子とともうれしそうだったわ。でも、先生も確信が持てないらしくて、明日もう一度検査をすることになったみたい。丹田呼吸のこと伝えておいたわ」

「昨日のことは内緒だぞ。それにあの効果かどうか分からないからな」

「分かっているわ」

「よし、今日、もう一度トライしよう」

「そうね」

「昨日、数馬に会ったよ」

「帰って来たの？」

「うん、仕事うまくいったみたいだ。だけど忙しくて大変そうだ」

「そう、数馬君が帰って来たんじゃ、秘密が知れちゃう。賢くん、わたしのアパートに来て。食事作っておくから」

「悪いな。じゃ、後で」

櫛田が横から賢に話し掛けた。

「先輩、今度祐子さんに会うとき、僕も連れて行ってくれませんか？」

「何故？」

「ただ、もっと知り合いになればいいなと思って」

「分かった」

「今日も会われるんでしょう？」

「うん。そのつもりだけど」

「今日は、附いて行っちゃだめですか？」

「今日はだめだ、用事があるから」

「分かりました。今度、きっとお願いします」

「ああ」

仕事を終えて、賢が祐子のアパートに着いたのは7時半を少し廻った頃だった。ノックをすると、祐子が白いブラウスにエプロン姿で出て来た。

「待っていたわ。さあ、上がって」

既に入り口にはベージュのスリッパが揃えて置かれていた。賢が中に入ると、祐子はまたドアの鍵を掛けた。まだ、夕日の陰影が残っていたが、祐子は既に窓のカーテンを引いてあった。部屋は小綺麗に整理されており、ディナーテーブルには青椒肉絲と、酢豚、卵スープ、焼売が二人分の箸と空のライスカップ、グラスとともに並べられていた。賢は鞆をソファの脇に置くと、祐子を抱きしめた。祐子もしっかり、賢を抱きしめた。

「お帰りなさい、あなた。今夜はずっとあなたって呼ぶわね」

「祐子、ありがとう」

「だめよ、おまえって呼んで。じゃ、お食事にしましょう」

「いや一寸待て、最初に祈りからだ。先ず身を清めて、それから祈ろう」

「わたし、もうシャワー浴びたわ」

「じゃ俺もシャワー借りるよ」

「どうぞ」

そう言うのと祐子は小走りでバスルームに行き、賢にタオルを渡した。

「ありがとう。じゃあ、少し待っていてくれ」

賢は直ぐにシャワーを浴び、やがて元の服を着て、バスルームから出て来た。

「お待ちどう、さあ祈ろう」

ふたりは、昨日と同様、亮子の回復を祈った。そして最後に賢が

「亮子の筋腫を取り除いて頂き、ありがとうございました」

と言うと、祐子も

「ありがとうございました」

とそれに倣った。祐子は待ち兼ねたかのように、

「さあ、お食事よ」

と言って賢の側をそっと離れ、冷蔵庫から、ビールを1本出してテーブルに置いた。賢が椅子に座ると、祐子は栓を抜き、

「先ず乾杯しましょ」

と言いながら賢のグラスに注いだ。そして、瓶を遠慮がちに賢に渡し、

賢が祐子のグラスに注ぐと、首を少し捻ってほほ笑んだ。その姿が賢にはたまらないほど愛らしく見えた。ふたり同時に「乾杯！」とグラスを合わせ、一気に飲み干した。

「あなた、どうぞ召し上がって」

祐子は新妻を装った。

「そうか、いただきます」

賢もそれに乗じた。

「おまえ、これ全部作ったのか？」

「焼売は買って来たのよ、あなた。お味はいかが？」

「うん、うまい。おまえが作ったものだから、みんなうまい」

「まあ、うれしいわ」

そこまで受け応えて、ふたりで吹き出した。

「祐子、だけど本当にうまいよ。おまえ、こんなに料理うまかったか？」

「秘密よ。ところであなた、亮子本当に喜んでいたの。昨日の私たちの祈りが効いたのかしら」

「そうかも知れない。今晚もう一回やったから、明日効果が出ているようだったら、その可能性が高い」

「そうね。でも、心を透明にするのが難しかったわ。目を瞑ってもあなたの姿が見え隠れしてしまうから」

「今日の瞑想がうまく出来れば、本当に効果があるんだ。本来、心が純粹だったら、意識で何でもできるはずなんだ」

ふたりは食事を終わるとソファーに移って休んだ。

「あなた、今夜はここに泊まっていてくださるわね。昨日は帰ってしまったんだから」

「お互い、ますます離れられなくなるぞ」

「いいわよ。もう、そうなりかかっているわ」

そう言いながら、祐子は賢の右肩に凭れかかった。賢は祐子の肩を抱いた。ふたりは暫く何も話さずにそのまま動かなかった。やがて、祐子が賢の顔を覗き込むように見つめた。賢は祐子の顔を両手で抱え口づけた。いきなり祐子のエプロンを外し、ブラウスの胸を開いた。そして祐子を

倒しながら祐子の上に覆い被さった。

「今日もまだだろう」

「まだ、今度のおやすみまではだめ」

.....

「さあ、無心に俺を想って。俺もおまえを想う。いいね」

「今日もね、遠野の方式で寝るの。私は仕方ないけど」

「うん」

ふたりはシーツを掛け、暫くベッドの中で抱き合っていた。そして、やがて、眠りに落ちた。

朝は祐子が先に目覚めた。賢が目覚めた時、祐子がピンクのブラウスに白いエプロンを掛け、台所に立って朝食の準備をしていた。祐子の姿が金色に輝いて見えた。

「祐子ありがとう」

祐子は料理の手を休め振り返って、賢に会釈した。賢は昨日の衣服を身に着けると、祐子の元に行き背後から抱きしめた。

「顔を洗って来て。もう出来るわ」

賢が顔を洗って戻ると、食卓には2つの大きな皿にスクランブルエッグ、ソーセージ、レタス、トマトとクロワッサンが2つづつ盛られ、ナイフ、ホーク、オレンジジュースとともに並べられていた。賢は、「これからの生を、祐子とともに生きたい」という思いが強くこみ上げて来た。その感覚は、普通の夫婦として一緒の生活をするというようなものではなく、もっとメンタルで永遠に愛し続ける存在として、祐子を意識しているという感覚だった。

「賢くん、さあ、いただきます」

ふたりはお互いを見つめ合いながら食事をした。賢は体の中を暖かい血が沸き返るように流れるのを意識した。祐子は賢の優しさに包まれているような心地を覚えた。ふたりは食事を終え、後を片付けるとアパートを出た。まず祐子が周囲を確認し、賢を外に出した。賢がエレベータに乗ったのを確認してから、祐子が賢の後を追った。すぐに祐子は賢に追いついた。

地下鉄の入り口で背後から数馬がふたりを呼び止めた。

「おはよう」

数馬はふたりが一緒なのは、地下鉄の駅に来る途中で遇ったからだと思
い、特に違和感を覚えなかった。

「賢、いろいろ面白い話があるんだ、あの失踪事件のことで。今日、夕
方会おうか？」

「そうか、それはいい、是非聞きたいもんだ。じゃあ、あのレストラン
で6時でいいか？」

「一寸早いけど、まあいいか。一応社内ネゴも一段落したし」

「じゃあ」

「私は一寸用事があるから、今日は遠慮しとくわ」

祐子は、賢とふたりきりで居られないと思い、内心がっかりした。午後
1時を少し回った頃、賢の席に祐子から電話があった。

「もしもし株式会社WECの内観でございます」

「賢くん、わたしよ。亮子ね、筋腫がほとんど消えてしまったって。泣
いて喜んでたわ。担当のお医者さんは不思議がっていたって・・・きっ
と効いたのよ」

「そうか、よかった」

「ところで、今日数馬君と会った後で、私のアパートに来てね。亮子が
来るのよ。話を聞こうと思って」

「そうか。だけど、夜俺が祐子のところに行くのを亮子さんが知ったら
まずいだろう」

「そう、だから、9時過ぎに来て。亮子はそんなに長い間居ないわ」

「うん、分かった」

賢が例のレストランに着いたのは6時10分過ぎだった。中に入ると、
既に数馬が窓際の席でコーヒーを飲んでいた。案内をするウエイトレス
がいないので、賢は自分で数馬のいるテーブルに行き、数馬と向かい合
って座った。

「ごめん、仕事の切りが悪くて」

「いや、俺も今来たばかりさ」

少しして例のウエイトレスが、いつものように地を滑るように静かに歩いて来て、賢の傍らに立った。

「いらっしやいませ、ご案内申し上げず大変失礼致しました。ご注文をお伺いしてもよろしいですか？」

「まだ、食事してないな。ここでしよう」

ふたりは暫くメニューを眺めていたが、ウエイトレスはそのままじっと動かずに賢の傍らに立ったまま、賢を見つめていた。賢はウエイトレスの視線を強く感じていた。まず、数馬がサーロインステーキセットを注文した。賢は

「俺は、カジキマグロのステーキにするよ」

と言いながら、ウエイトレスの方を見た。目が合った。瞳の奥にまるで深い海を見ているような気がした。そして次の瞬間、意識がすーっと吸い込まれてゆくような感覚を覚え、一瞬思考が止まった。ウエイトレスが、

「パンとご飯のどちらになさいますか？」

と訊いたが、その声が全く聞こえなかった。数馬は一寸大きめの声で言った。

「おい、賢どうした」

「・・・あっ、ごめん、一寸目眩がして」

「お客様、大丈夫ですか？あの、パンとご飯とどちらにされますか？」

「パンにしてください」

「食後のお飲み物はコーヒー、紅茶のどちらになさいますか？」

「コーヒーにしてください」

賢はウエイトレスから目を逸らせて応えた。

「かしこまりました」

そう言うと、ウエイトレスはすーっと去って行った。賢は不思議な落ち着きを覚えた。

「賢、大丈夫か？どうもこの店に来ると、お前何か変だぞ」

「俺もそう思う。だけどもう大丈夫だ。ところで鹿児島はどうだった？」

「うん、仕事の方は、相手の会社のレベルが、うちのレベルに合わなく

て交渉に難航したけど、何とか契約書を交わせる前段階まで到達したよ。後はお互いに社内の調整をして、現行システムが今回の妥協点まで改善できるかを確認してから調印する予定だ」

「お前も頑張るな。交渉って、結構きついだろう」

「そうだな、相手の本音を引き出すのが大変さ。お前も知ってる通り、企業は世間に示す表の顔と違う裏の顔を持っているもんさ。その裏の顔が、表の顔にちらちら見え隠れする。数日交渉を続けていると、相手の考えていることまで見えて来る。経験を積まないと、それを読み取るのは難しいんだ。俺もやっと、会話の中に相手の本音が読めるようになって来た。もっと研鑽を積まなくちゃな」

「そうだな、おまえの言う通りだ。俺も最近しみじみ実感しているよ」

「契約の方は何とかかなりそうなんだけど、相手の会社の担当者と夕食を共にしているときに、あの7番目の失踪事件の話になったんだ。鹿児島でもあの7番目の事件の時は随分大騒ぎになったようだ。あの失踪した原君ってのは、地元では知らない人が無いくらい有名な人だったようだぜ。天才肌だったんだ。前に祐子が言ってたけど、原君はいつも「今の社会の仕組みは本来の逆だ」って言ってたみたいだ。あの失踪事件以来、原君の話した言葉を研究するグループが出来ていて、水曜日と金曜日の夜に会合を持っているんだ。俺も出張中に、金曜日の会合に特別参加させてもらったんだ。結構すごい人達が集まっていたんでビックリしたよ」

「どんな人たちが集まっていたんだ」

「会社の社長とか、大学の教授とか、大学生、一般の主婦、中学生もいた。それから、結構な年のお婆さん。いろいろな世代の人たちが集まっていて、何か、あんな会合は見たこと無いな。不思議な感じがしたよ。よく聞いてみるとどうやら、原君と何らかの接触のあった人たちの集まりの様だったんだ。原君が居た時は、皆不思議なことを話すなんて思う程度だったようだけど、いろいろな機会に、それが最先端の技術や、思想、経済システムに触れる部分が有ることが分かってきて、参加した人たちはそのことを誰かに伝えなければという義務感に駆られたようなんだ。原君って不思議な人だよ。失踪事件そのものは単純だったんだけど、

全く手懸かりが掴めていないみたいだな。おれ、原君の言葉の中で一つ心に残った言葉があったんだ。「愛を持って、死を成就できれば、一応生きた証になる」という言葉さ。その前後の話は知らないけど、心に残って離れないんだ」

その時、ウエイトレスがふたりの注文した食事を運んで来た。

「お待たせしました」

ウエイトレスが食事を並べている時、賢が数馬に言った。

「死を持って、愛を成就する — 何か、死ぬことが人生のゴールみたいに聞こえないか」

「俺には「ある死の形」を人生の最終ゴールに定めよと言っているように聞こえるぜ」

「うん、確かにそう言っているようにも思えるな。ただ、「愛を持って」と言うところがはっきり分からないけど」

「そうなんだ。まあ、俺はこの言葉が心に残ったんだけど、あの会合に来ていた人たちは、それぞれに心の琴線に触れた言葉があるようだったよ」

「それではごゆっくりお召し上がりくださいませ」

ウエイトレスが、食事を並べ終えても暫く賢の側に立っていることに気づき、ふたりは同時に

「ありがとう」

と言い、再び会話を続けた。ウエイトレスは厨房の方にすーっと去って行った。

「そうか。何か科学的なことを言っている人はいなかったか？」

「何人かいたよ。だけど、俺が出席させてもらったのは1日だけで、もう、既に検討された話が随分あるようだった。いま、その言葉のリストを作成中らしい。今までの科学者や哲学者が言わなかったような言葉が多くて、言葉の意味もよく分からないようなものもあるようだ。例えば、「ごくみを大切にしないでだめだ」とか、「宇宙には無数の複留がある」とか、誰も分からない言葉がちらちら出てくるようだ。それに、「今、世界が変わらないと、もう、人類は2度と変わる機会を持ってない」なん

て言っていたらしい。含蓄あるよな。今の世の中見ていると、俺たちだって変えなくちゃならないって思うものな」

「失踪事件とは別に、原君って人に会って見たかったな。祐子もそう言ってたな」

「ところで、今朝祐子に会ったとき何か嬉しそうだったけど、いいことでもあったのかな？」

「亮子が病気を抱えていること知っているだろう、最近大分具合が悪くて、医者に掛かっていたんだけど、昨日から急に病状が回復に向かってきたんだ。その所為じゃないかな」

「そうか。あの亮子が・・・最近一寸元気がなさそうで気になっていたけど、体の具合が悪かったのか。そうだったのか。でも、良くなってきて良かったな」

「うん、今日はもっと回復して、もう医者も殆ど大丈夫だって言っているらしい。祐子に連絡があったようだ。今日、祐子は亮子に会うみたいだよ」

「そうか、完全に直るといいな」

「この前の休みに天城の八丁池と浄蓮の滝に行って来たよ。あの、1番目の失踪事件について何か分かるかと思って」

「熱が入っているな。日帰りか？」

「いや、最初は日帰りの予定で、まず浄蓮の滝に行ったんだ。それから八丁池に行こうとしたんだけど、天城峠で酷い雨に遭っちゃって、結局諦めてまた浄蓮の滝に戻ったりしたもんで、とうとう時間が無くなっちゃって、結局一泊して翌日八丁池に行ったんだ」

賢は祐子と一緒に行ったことは口にしなかった。数馬は賢が一人で行ったものと思ひ込み、宿泊についてはそれ以上聞かなかった。

「そうか。それは面白かったな。で、1番目の失踪事件は何か分かったのか？」

「あの事件は、俺は時空の問題だと思っている。何かそんな感じがしたんだ。実際に失踪した現場も見て来たんだけど、そんな感じがした」

賢は失踪した女性に会って、ノートを渡されたことも口にしなかった。

「そうだ、忘れていた。君達におみやげを買って来たんだ」
そう言いながら、数馬は仕事鞆の中から紙包みを出した。
「ありがとう、悪いな。俺、何もみやげ買って来なかったのに」
「そんなことはいいよ。俺は遠くに行ったから一寸珍しいものを買って来たんだ。祐子に合う機会があるか？」
「うん、亮子の件で確認したいこともあるし、すぐ会うことになると思うよ」
「そうか、それじゃこっちを祐子に渡しておいてくれよ」
「分かった」
賢はもらった包みを開けてみた。
「おう、珍しいものだな。猿の絵が描いてある」
「初鼓って言うらしい。不浄を祓うものらしいよ。おまえ、こういうの好きだろう」
「わるいな。祐子の方、分かった。渡しとくよ」
賢は初鼓を元のように包んだ。その時、ウエイトレスが食後の飲み物を持って来て、
「食後のお飲み物でございます」
と言うと、数馬の前に紅茶、賢の前にコーヒーを置いた。ふたりが
「ありがとう」
と言うと、ウエイトレスはまた静かに厨房に戻って行った。
やがてふたりは食事を終えた。
「それじゃ、帰ろうか？」
「うん。今日は俺が驕るよ。この間はずいぶん世話になった上に、驕ってもらっちゃったからな」
「わるいな」
数馬はそのままレストランを出て外で賢を待った。賢が鞆から財布を出して支払いをしようとしていると、レジの所にさっきのウエイトレスがやって来た。賢はウエイトレスの方を見ずに1万円札で支払った。ウエイトレスはかしこまった雰囲気、
「いつもご利用頂きまして、ありがとうございます。お釣りでございま

す。あの、お客様、後でこれをご覧になって頂きたいのですが」といいながら、釣り銭と一緒に、封をした一通の表書きの無い封筒を賢に渡した。

「何ですか？」

「はい、一寸お話したいことがございまして、そのことを記してございます。後で読んで頂けないでしょうか？」

「そうですか」

賢はウエイトレスの顔を見た。しかし、またあの吸い込まれるような感覚が襲ってきて、すぐに目を逸らせた。

「わかりました」

封筒と財布を鞆の中に入れて、賢は出口の方に足を向けた。

「ありがとうございました」

ウエイトレスが背後から声を掛け、賢が出て行く姿を見つめていた。賢もそのことに気付いていたが、できるだけ気付かない様子を装って外に出た。外では数馬が待っていた。

「ごちそうさま」

「いや、こっちこそ。みやげなんか貰っちゃって」

「じゃ、アパートに戻ろうか？」

少し歩いてから賢がふとレストランの方を振り返ると、あのウエイトレスが出口の窓越しに、こちらを見つめているのが分かった。賢は直ぐに視線を戻した。ふたりは賢の部屋のドアの前で分かれた。8時を少し回っていた。賢は部屋に入ると、数馬にもらったみやげを鞆から取り出し、包みを解いて書棚の空いている場所に飾った。そして、ウエイトレスから受け取った封筒をテーブルの上に置くと、鞆を放り出し、すぐにシャワーを浴びた。水しぶきを浴びていると、次第に祐子の姿が浮かび上がってきた。それに重なるようにあのウエイトレスの姿が現前してきた。賢は意識を祐子の姿に戻したが、またすぐにウエイトレスの姿に変わってしまった。賢は首をぶるぶると振りイメージをかき消した。シャワーから上がると下着とシャツを新しいものに変え、ウエイトレスから受け取った封筒の封を切った。中から一通の手紙が出てきた。流れるよう

な美しい字で綴られていた。

「拝啓

内観賢様 突然お手紙を差し上げましたことを、お許し頂きたく思います。私は藤代亜希子と申します。この7月で24歳になりました。8年前高校1年生の時に、あなた様に命を救って頂きました。私がまだ高校に入学したばかりの時でした。私は5人の不良グループに拉致されておりました。不良達はどこかの大学の不良学生のような様子でした。日は暮れかかっていた。彼らの内の3人は、港の倉庫の前に停めた車の中に私を閉じ込めたまま、ふたりを残してどこかに行きました。残ったふたりの会話から、私を誘拐し、両親を脅して身代金を取ろうとしていることが分かりました。脅迫の電話で場所を特定されないように、彼らは街に出て行き、電話ボックスから脅迫電話をする計画のようでした。残ったふたりは暫く私を閉じ込めておいて、身代金を取った後、私を殺して山の中に埋めると話していました。私は怖くて震えていました。そこへあなたが車で通り掛ったのです。あなたはどのように気が付いたのでしょうか。車を停めて、すぐに降りゆっくりふたりに近づきました。ふたりは、何かあなたと話していましたが、そのまま、慌てて私を車から降ろすと、急いでその場から逃げ去りました。あなた様は、しばしの間私の肩を優しく抱いてくださり、「怖かったら、もう大丈夫だよ」と仰いました。今でもその時の優しいお言葉が耳の中に響いていて、涙がこみ上げて参ります。ご自分のお車に乗せられて、「あの学生達は、自分を見失っていたんだ。もう二度と君を襲うことはない」と仰いました。あなた様は私を連れて近くの交番まで行って、私を警察官に預け、そのままお立ち去りになりました。警察官が事情聴取をしようとして準備している間に消えてしまわれたのです。でも、幸いなことに私はあなた様の車が江東ナンバーだったと覚えておりました。その後、江東区のファーストフード店、ファミリーレストランを点々とアルバイトして歩き、あなた様にお礼を申し上げたく、長い間お探し申し上げておりました。あなた様はもうお忘れになっておられるかもしれませんが、私の心の内にはいつもあなた様がおられます。幸いなことに、あのレストランで働か

せて頂くようになりましてから間もなく、あなた様にお会いできましたのでございます。私の心は躍りました。でも、私はあのレストランで給金を戴いて仕事をさせて頂いておりますので、あなた様がお見えになった時も、お話を申し上げることは控えさせて頂きました。あなた様とお友達が、よくあちらにお見えになることを知ったからでございます。そして、今日やっとあなた様に、このようなお手紙をお渡しできる機会をお与え頂き、この上ない喜びと感じております。あなた様は、素晴らしいご友人をお持ちでおいでです。これも一重にあなた様のお心の広さによるものとお察し致します。私も、是非あなた様のご友人の端にお加え頂けたらと、小さな胸を期待でときめかせております。私は東京の青山に住んでおります。父、母ともに健在で、一人娘として育ちました。もし、お許し頂けましたら、一度東京のどこかでお会いさせて頂きたく存じます。私の家の電話は03—9358—4572でございます。携帯電話は持っておりません。メールアドレスは **akiko39mr@promnet.com** です。お返事をお待ち申し上げます。

藤代亜希子より

かしこ

賢は手紙を読み終えて、ようやく、自分が交番に預けた高校生とレストランのウェイトレスのイメージが重なった。今日、このことを祐子に話そうと思った。時計は8時50分を回っていた。賢は数馬からのみやげと封筒を鞆に入れ、それを手にしてアパートを出た。祐子のアパートに着くと、入り口のドアを軽くノックした。

「お帰りなさい。待っていたわ」

「亮子さん、もう帰ったのか？」

「うん、さっき帰ったわ。中に入って」

賢は揃えてくれてあるスリッパに履き替えて部屋の中に入り、鞆を置いた。祐子がいきなり賢に抱き付いた。

「賢くん、寂しかった」

ふたりは、強く抱き合い、唇を求め合った。暫く立ったまま抱き合っていたが、やがて、賢は祐子をそっと離し、

「数馬がみやげを買ってきてくれたよ」

と言って鞆から紙包みを取り出し祐子に渡した。そしてウエイトレスからの封書をテーブルの上に置いた。

「ありがとう」

祐子は紙包みをテーブルの上に無造作に置き、賢の手を引っ張ってソファに導いた。賢も祐子の為すままにソファに座った。

「亮子さん、どうだった？」

祐子は賢に身を寄せて言った。

「もう大丈夫よ。お医者さんも大丈夫だろうって言ってるそうよ。もう、超音波診断では筋腫を見い出せないって。消えてしまったのよ」

「亮さんは純粋なんだ。エネルギーを受け入れやすいんだな。君のおかげだよ、祐子」

「あなたのおかげよ。素敵だわ！」

やがてふたりは、もう一度軽く口づけをし、身体を寄せて座った。

「わたし、あなたがいないとだめ」

「祐子、俺もだよ。・・・天城には俺一人で行ったことになっているからな」

「勿論よ。ふたりだけの秘密よ」

「今日、数馬が面白い話をしてくれたよ。あの7番目に失踪した原君はすごい人みたいだよ。おまえが言ってたように、天才的な人なんだって。鹿児島市内ではもう有名な話みたいだよ。原君が話した言葉を研究する会が出来ているんだって」

「ふーん、やっぱり彼女の言ったこと本当だったんだ。私の鹿児島の友達よ」

そう言いながら、祐子は漸く賢から離れた。

「亮さんの様子どうだった？」

「彼女、大分やつれてしまったけど、今日はとても明るかったわ。ご両親に言わずに苦しんでいたのね。涙流しながら喜んでいたわ。昨日と一

昨日の夜、お臍の辺りから子宮の辺りに掛けてすごく熱くなったんだって。どうやら、私たちがお祈りしていた頃よ、それから少しして赤い塊が降りたんだって」

「やはり、効いたんだな。よし、今日もやろう。もう一回、駄目押しのつもりで」

ふたりは昨日の通りの瞑想を行った。そしてそれが終わると賢は

「亮子さんを直して頂き、ありがとうございました」

と言った。祐子もそれに続いて、

「ありがとうございました」

と言った。ふたりは暫くの間深呼吸をして息を整えた。やがて、賢は

「数馬のみやげ、見てみないか？俺は初鼓つてのをもらったよ。あいつにみやげ買って来なかったのに、あいつは優しいな」

「本当ね。開けてみるわ」

そう言いながら、祐子はテーブルから包みと封書を持って来た。

「これは何？」

「うん、後で話すよ」

祐子は包みを開けた。「鹿児島県の民話集」という冊子だった。

「面白そう」

祐子はそう言うと、冊子をぺらぺらと2、3ページめくり、木花咲耶姫このはなさくやひめの話のページを開いて読み始めた。

「ふもと おおやまつ みのかみ霊峰金峰山の麓に大山津見神という神様が住んでいました。この神様には二人の娘さんがいました。姉は石長姫いわながひめ、そして妹が木花咲耶姫です。姉石長姫は容姿は醜く、妹木花咲耶姫は誰もが振り向く綺麗な方でした。ある日のこと、木花咲耶姫がはた機を織っていますと、高千穂からおいでになられたにぎのみこと邇邇芸命がそばを通り掛かり声を掛けられました。「あなたはどなたですか？」「ご兄弟は？」質問に姫が答えるたびに命みことは姫を好きになっていきました。そして「わたしの后きさきになって頂けませんか？」と求愛されました。姫は返事に困り、「わたくしが今直ぐお返事をするにはできません。もしあなた様がそのようなお考えになれるのなら父の大山津見神おおやまつ みのかみに相談なされてください」と答えました。命は

早速、大山津見神のところに行き、姫を后にと申し出ました。大山津見神は邇邇芸命からの申し出を大変喜びましたが、1つ条件を出されました。それは、「姉の石長姫もいっしょに貰ってください」ということでした。命は了解し、姉妹を娶りました。でも命は石長姫をどうしても気に入らず、大山津見神に送り返してしまい木花咲耶姫だけをお后にされました。大山津見神は言いました。「2人の子を差し上げたのは、石長姫はどんな風雪でも石のように命を守るであろうし、木花咲耶姫はいつも木の花が咲き乱れ栄えるようにと心を使うと思ったからです。木花咲耶姫だけがお気に召されたということは命の命は木の葉のように脆くなるでしょう」と申されました。それでも命は木花咲耶姫をお后にしました。ふたりは川辺の笠狭宮^{かささのみや}というところで新居を構えられ、一晚の契りを結びました。木花咲耶姫には子供が出来、それを命に伝えました。命は自分の子供かどうかをお疑いになりました。姫は本当に命との子であることを解らせようと、建物に火をつけその中で子供を産まれたそうです。火は勢いよく燃え、心配でしたが、姫はふたりの子供をお産みになりました。激しく火が燃えているときに産まれた子を火闌降命^{ほのすせりのみこと}、火が少し弱くなったときの子を火遠理命^{ほとほりのみこと}といいました。ふたりの子に恵まれた命はやがて日本を納められ、姫は日本の女のお手本といわれるようになったとき。おしまい。なんかこのお話、伊豆の民話集にもあったわね」

「この話は古事記にある話だから、そこからの転用じゃないかな。大体、日本の神話は、地域をはっきり断定しにくいんだ。不思議に思う？どちらかと言うと、違う次元の話が無理矢理、この3次元に写したような感じだな。世界規模でもペトログリフなんかはそうだけだな」

「えっ、それ何？」

「岩刻文字のことだよ。世界各地の磐^{いわくら}に不思議な文字が刻まれているのが発見されているんだけど、文字の意味を解析した研究者によると、皆、同じような内容だってことだ。不思議だろう。太古の昔は地球上の意識が一つだったんじゃないかなんて考えている人もいるみたいだ」

「そういう磐には何て書いてあるの」

「研究者の話では、「地母神に祈る」って書いてあるそうだ」

「地母神って「母なる大地の神」って意味？」

「よくは分からないけど、そんな意味かな」

「ふうん。賢くん、詳しいわね・・・ところで、その白い封筒なあに？」

「うん。今日、祐子に相談したくて持って来たんだ」

そう言うと、賢は封筒から手紙を取り出し祐子に渡した。

「今日、数馬と会った後で精算をするとき、例のウエイトレスが俺にこれをよこしたんだ。どうやら、彼女は高校生の時に俺が助けてやったのを覚えていて、お礼を言おうと思って俺のことずっと探していたようなんだ。偶然あのレストランで会ったんで、俺に手紙を書いたって訳だ。会ってくれて言うんだ。おまえにも話しておいた方がいいと思って」祐子は手紙を読んだ。読んでいる内に、次第に不快な気分になってきた。賢があのウエイトレスに心惹かれるようにでもなったら困るが、ひと時賢と一緒に消えていたという事実についても、もっと知りたいという思もついが纏れた糸のように絡み付いてきた。

「賢くん、一度会ってみたら？」

「そうだな。あの時の消滅についても原因を知りたいし」

「あのひと、すごく上品で美人だから、私ちょっと心配なんだけど」

「大丈夫、俺には祐子という一生愛し続ける、もっとすごい美人がいるじゃないか。心が動くわけないよ」

それを聞くと、祐子は黙って賢ににじり寄り、じっと賢の目を見つめた。

そして、賢の耳元で

「ねえ」

と言った。賢は祐子を抱き寄せ口付けた。

「今日はもう大丈夫」

賢はまるで挑発でもするかのような祐子の言葉に、祐子の心の葛藤を覗いていた。

「今日も泊まって行って」

「祐子、おまえの中に新しい生命が誕生してしまうぞ」

「まだ、明日くらいまでは大丈夫」

賢が祐子の髪を優しく撫でてしていると、祐子はそのまま眠りに落ちた。賢も眠りに落ちていった。翌朝も賢が目を覚ました時には、既に祐子は身繕いを整え、朝食の支度も済ませてあった。賢も軽くシャワーを浴びてから食卓に来た。

「おはよう、早いな」

「おはよう、よく眠れた？」

ふたりは抱き合って、軽く口づけした。

「うん。祐子と一緒にいるなんて、夢のようだ」

「私、もう本当にあなたから離れられない」

ふたりは食事を済ませ、一緒にアパートを出た。昨日と同じように、先ず祐子が外に出て、誰も居ないことを確認してから賢を先に送り出し、暫くして、祐子が後を追う形をとった。

「おはよう」

地下鉄の入り口で、またして背後から数馬が声を掛けた。

「おはよう、数馬君！又会ったわね。おみやげありがとう。民話は大好きよ」

「おはよう」

「賢、もう祐子に渡してくれたのか？」

祐子は「しまった」と思った。

「あれから、祐子のところに寄ったんだ」

「そうか、おまえに手間掛けちゃって、悪かったな。それなら、俺が行けばよかった」

「いいんだ。ちょっと、祐子に話があったもんで」

「そうか」

「じゃ、また、連絡するよ」

「じゃ」

数馬はふたりと分かれて、反対方向のプラットフォームに入って行った。直ぐに電車が入って来た。朝の電車はいつもの通り混んでいた。ふたりは立ったまま話した。

「いつまでも隠しておけないわね」

「うん、俺たちのこと、そのうちそれとなく話しておくよ」

「あなたに任せるわ」

満員の電車の中でふたりは前向きに体を密着させていた。祐子はまた、賢の胸の中に抱かれている感触を得て夢心地でいた。やがて、賢は祐子を残して電車を降りた。賢は事務所に着くと亜希子にメールを送った。電話をする気にはなれなかった。

「藤代亜希子様

内観賢です。

お手紙を頂きありがとうございました。もしよろしければ、今日の夕方に時間を取ります。返信を待っております」

賢は出来るだけ簡単な表現にした。

10分もしない内に亜希子から返信が来た。

「内観賢様

ありがとうございます。もし可能でしたら、午後6時に青山のレーベンスブルグにいらして頂けますでしょうか？地下鉄の青山一丁目A3番の出口を出て、右に50メートルほど行ったところにあるレストランです。入り口のあまり目立たないレストランですが、他の人たちを意識しないでお話のできる場所です。お返事をお待ち申し上げます

藤代亜希子より」

賢もすぐに返信した。

「藤代亜希子様

了解致しました。それでは6時に青山のレーベンスブルグに伺います。

内観」

亜希子からまた、すぐに返信が来た。

「内観賢様

直ぐにご返信頂き、大変恐縮に存じます。

それでは午後6時にレーベンスブルグにてお待ちしております。

亜希子より」

5時45分に賢は青山一丁目に着いた。A3番の出口を出て右に曲がり、少し行くと、確かにレストラン・レーベンスブルグと書かれた大理石の

標識があった。賢は店の中に入った。手前中央に大きな大理石の壁があり、入り口と店内を仕切っている。40歳前後の正装したウエーターが寄って来て懇懇に言った。

「内観様でいらっしゃいますか？」

賢は少し驚いたが、軽く会釈した。

「亜希子様がお待ち申し上げておられます。ご案内させていただきます」

賢はウエーターに従った。目立たない造りの入り口からは想像もできないほど、ゆとりのある席の配置をしたレストランだった。室内は少し照明を落としてあり、所々に鉢植えの植木が配置してあった。賢は、「なるほどここなら人目を気にしなくても済む」と思った。ウエーターは賢を一番奥の席まで案内した。一人の美しい女性が立って待っていた。落ち着いた感じの白地でフリルの付いたブラウスとベージュのスカートを身に着けている。いつものウエイトレスとは別人のようだった。

「いらしてくださって、ありがとうございます」

「いえ、僕も一度お話ししたいと思っておりました」

「どうぞ、お座りくださいませ」

「はい、あなたから」

ウエーターが亜希子の椅子を押して着席を補助した。賢は亜希子が着席したのを確認してから座った。ウエーターは亜希子の方を向いて、

「お嬢様、お飲み物はどうなさいますか？」

と聞いた。亜希子は返事をせずに、賢に向かって言った。

「内観さん、何がよろしいですか？」

「コーヒーをお願いします」

「それでは、コーヒーを二つ」

「いつものコーヒーでよろしいでしょうか？」

「いいわ」

「かしこまりました」

ウエーターが行ってしまうと賢が言った。

「ここはよく利用するんですか？」

「はい、家が近いものですから、時々来ております」

「お手紙拝見しました。もう、ずっと昔のことのような気がします。あのレストランであなたにお会いしたとき、「何処かで遇ったことがあるかな?」と思いましたが、思い出せませんでした」

「わたくしが高校1年生の時でした。今はレストランで働ける年齢ですもの。もう8年も経ちました。改めて、あの時は本当にありがとうございました。今、わたくしがこうしてここにいられるのも、あなたがあのとき助けてくださったからです」

「やっと、思い出してきました。あのとき、僕は客先を訪問して会社に帰るところだったんですが、少し海を見たくなくてあそこを通ったんです。ふと見ると、倉庫の陰に1台の古い乗用車が停めてあり、二人の学生風の青年が落ち着かない様子で、あちこちきょろきょろしながら立っていたんで、「変だな」と思って乗用車の中を見たら、学生服姿の女性、君のことだけど、その彼女が後部座席に、下を向いて蹲っていたんです。直感的にこれは何かまずいことが起きていると思ったんです。僕はすぐ車から降りて、ふたりに近付いたんです。ふたりが怯えていたのははっきり覚えています。彼らはお金が欲しかったようです。確か、僕はあのふたりに「ここで人生を捨てるつもりか」というようなことを言ったと思います。ふたりはすぐにあなたを車から降ろして逃げ去ったのです。その後はあなたのお手紙にあった通りです」

丁度頃合いを見たように、ウェイターがコーヒーを持って来た。

「コーヒーでございます。こちらが白砂糖、こちらが黒糖でございます。こちらがミルクでございます。ごゆっくりお過ごしくださいませ」

「ありがとう」

亜希子はそう言うと、

「内観さん、お砂糖はどうされますか?」

と聞いた。

「いや、ブラックで」

「そうですか、どうぞお召し上がりくださいませ」

亜希子はそう言って自分のコーヒーに白砂糖とミルクを入れ、スプーンでかき混ぜながら話し始めた。

「学校からの帰宅途中に連れ去られたのです。2台の古い車がわたくしを間に挟んだ形で並進し、ゆっくり走りながら窓を開け、声を掛けてわたくしを呼び止めたのです。中に乗っていたのは覆面をした人達でした。わたくしが振り向くと同時に3人の覆面をした男達が車を停めて降りて来て、無理やりわたくしを車に押し込んで、自分たちもその車に乗り込んだのです。車を走らせながら、わたくしを脅しました。

「おまえの親から金を巻き上げるんだ。大きな声を出すな。俺たちがこんなことをするのは最初で最後だ。だから証拠を残さない。もし俺たちの計画の邪魔になるようならすぐに殺す。そして、死体を誰も分からないように始末する。もし生きていたければ、俺たちの言う通りにしろ、俺たちは金さえ手に入れば、人を殺したいとは思わない」

というようなことを言ったんです。わたくしはお金が彼らの手に入ろうが、入るまいが殺されると思いました。もう恐怖の限界を超えて、ただ震えていました。彼らはあの場所に車を止めると、わたくしをもう一台の車に乗せました。そちらの車に乗っていたのがあのとき、あなたが説得してくださった二人です。わたくしはあの二人のことはよく分かりませんでした。ただ、車の外で、わたくしを殺す話をしていました。

「金取ったら、俺っちがこいつを殺すんかな？」

「俺やだよ」

「大丈夫、このナイフで心臓を突けばすぐに死ぬさ」

「おまえやれよ」

「おまえがやれ」

というような話をしていたんです。わたくしは神様にお祈りしました。

「神様、わたくしをお救いください。使者をお遣わしください。わたくしはその使者と共に、一生苦しんでいる人を救うことに命を捧げます」
確か、そんな風にお祈りしました。あなたをご覧になったわたくしの姿は、祈っている時の姿だったと思います。そこであなたが現れてわたくしを救ってくださったのです。わたくしは震えていて、自分では立ち上がることもできませんでした。あなたは多分わたくしを抱きかかえるようにして車の外に出し、涙を流していたわたくしを優しく抱き締めてく

ださいました。あの時心の中で「この方と共に生きることになるんだ」と思いました。でも、あなたは派出所にわたくしをお預けになると、そのまま去ってしまわれました。どうして、あなたはいなくなってしまうたのでしょうか。それからわたくしはあなたを捜しました。ただ一つの手懸かりは車のナンバープレートの江東という文字でした。それだけは覚えていたのです。ですから、手紙でもお話しさせて頂いたように、大学の頃から江東区にある、人の多く出入りするファーストフード店やファミリーレストランなどでアルバイトをしながら、あなたを捜していたのです」

「僕が去ったのは、もしあそこにいたら、あの二人の学生のことを話さなければならなかったに違いないからです。それに、あなたがもう大丈夫だと判断したからです。あなたにこんなに苦勞をさせてしまって、本当に申し訳なく思います」

「いえ、今、こうしてここにあなたといることで、過去の心の苦しみはすべて^{ほうまつ}泡沫のごとく消えました。もう一つ、あなたに大切なことを聞いて頂きたいのです。あのとき、わたくしは殺されると知ってからずっと体が恐怖で震えていたのですが、その震えがいよいよ激しくなり、呼吸もできないほどになってきていたのです。そして、神様にお祈りを捧げたのは、もう意識が無くなるのではないかと思った時なのです。あなたが現れて、わたくしを助けてくださった時、本当は自分ではどうして外に出たのか分からないうちに車の外にいたのです。そして、急に震えが止まっているのに気付きました。自分があなたの腕のなかに抱かれていると知ったのです。あの時以来、時々自己消滅のようなことが起きるようになりました。この間、レストランで起きたのもそういう現象です。あのレストランで初めてほかの人に、そのことを知られたのです。それまでは、わたくしにこういう現象が起きることについて誰にも知られておりませんでした。このことは今、初めてあなたにお話しました」

「そうだったんですか？あのレストランでの消滅はやはりあなたに関係していたんですね」

「あのとき、わたくしは神様に誓いました。「これからの人生、あなた

と共に苦しんでいる人を救うことに命を捧げます」と。わたくしの心の中には何時も、あなたがいらっしやって、苦しい時には何時もわたくしを守っていてくださったのです」

「僕は人を救うなんて大それたことはできません。あなたのことも、あのとき以来、守ろうという意識を働かせたことはありません。自分の意志に基づいて生きています」

「内観さん、わたくしもやっとなあなたに巡り逢わせて頂き、それだけでこの上なく幸せです。本当に厚かましいのですが、どうかあなたのお友達のお一人に加えて頂けませんでしょうか。皆様のお邪魔にならないように致しますので、どうかわたくしの願いをお許しください」

「そんな風に言わないでください。ぼくたちがこうして会ったときから、もう既に僕たちは友達です。いつでも仲間に入ってください。あなたもご存じのように、僕たちはよくあのレストランで会っています。でも、あなたはあそこで働いているんでしょう？」

「昨日あなたにお手紙を差し上げた後で、あの店を辞めました」

「そうでしたか。じゃ、今度は客として、一緒に仲間に入ってください。明日、皆を紹介します。午後6時にあのレストランに来てください」

「ありがとうございます」

亜希子の頬に涙が流れた。このレストランでは誰も勘定書を持って来なかった。賢と亜希子が立ち上がると、先ほどのウェイターがやって来た。

「僕が支払います。あの、チェックをお願いします」

「いえ、このお支払いは、すでに亜希子様がなさっておられます。ありがとうございます。また是非ご来店くださいませ」

レストランの外に出ると、賢は「ありがとう」と言った。亜希子はまだ目に涙を溜めていた。

「ありがとうございます。では明日あのレストランに伺います」

ふたりは軽く会釈して分かれた。賢は地下鉄の方角に向かって歩き出した。亜希子は暫く賢を見送っていたが、やがて賢とは反対方向に向かって歩き始めた。賢は地下鉄の改札口の電話ボックスで祐子のスマホに電話を掛けた。7時を回っていた。呼び出し音が鳴るか鳴らない内に祐子

は応答した。

「もしもし、祐子、今どこにいる？」

「あなたを待っているのよ。お部屋よ。お食事も作ったわ」

「おれ、今青山一丁目の駅にいるんだ。さっきまで、亜希子さんと会って話をしていたんだ。今から帰るよ」

祐子は心が乱れるのを覚えたが、

「待ってるわ」

とだけ言った。1時間程して、賢は祐子のアパートの扉をノックした。

「おかえりなさい」

祐子が出迎えた。祐子は朝の服から着替えていた。クリーム色のブラウスと、淡いブルーのスカートを穿いていて、淡い桜の花柄のエプロンを首からすっぽり掛けていた。かわいいと賢は思った。いつものようにスリッパが揃えてあって、部屋がきちんと片付けられていた。賢が中に入ると祐子は扉をロックした。賢は部屋の奥に入ると鞆を脇に置いた。祐子が駈けてきて、背後から賢に抱きついた。ふたりは激しく口づけを交わした。

「待ってたの」

「ありがとう」

「あなた、シャワーを浴びた方がいいわ」

「うん」

賢は簡単にシャワーを浴び、元の服装でテーブルに戻って来た。

「食事にしましょう。今日はトンカツを作ってみたわ」

祐子はみそ汁を碗によそいながら言った。

「たまにはトンカツもいいでしょ」

「祐子、おまえ本当に何でもできるんだな」

「ビールもあるわよ」

ふたりはビールをグラスに注ぎ、乾杯した。二つの大きめの皿の上に千切りのキャベツを山盛りに盛り、その上にトンカツがきれいに盛り付けられていた。トンカツの皿の横には冷や奴の小鉢と茄子の漬け物の小鉢が置かれていた。

「とても歯触りがよくて、味も抜群だ」

トンカツを一口食べて、賢が味を褒めた。

「うれしい。お豆腐もどうぞ」

ふたりは食事を楽しんだ。食事が済むと祐子は

「あなた、ソファーで休息^{やす}んでいらっしゃって」

と言った。賢は洗面所で口を濯いでからソファーに戻り、テレビのスイッチを入れた。丁度ニュースをやっていた。

「日本時間の7月23日午前3時、現地時間の午後1時ロスアンジェルス郊外で35名の集団自殺の死体が発見されました。死体は死後12時間経過している模様で、現在警察当局が原因の究明に当たっております。集団自殺は7月10日にもニュージャージーで起きており、当局はその関連性についても調査を始めました……」

「祐子、なんか奇妙なニュースをやってるよ」

「うん、聞こえたわよ。この間も起きたのよね」

「なんだろうな」

祐子が片付けを済ませ、洗面所で口を漱いでから、エプロンを外しながらやって来て賢にくっつく様に座った。賢はテレビのスイッチを切った。

「どうしたんだろう。何か宗教的なことが絡んでいるのかな」

「この前の集団自殺は山岳会の仲間だったわね」

と言いながら、祐子は賢の腿^{もも}に右手を置いて、頭を賢の左肩に凭れかけた。賢は祐子の右手の上に自分の左手を重ねて軽く握った。

「あなた、今日亜希子さんとどんな話したの？」

「亜希子さんは8年前に不良学生に誘拐されて、身代金を要求されそうになったんだけど、たまたま車で通りかかった俺が見張り役の2人と話を付けて、解放させたということを確認し合ったんだ。亜希子さんは俺にお礼を言いたかったみたいだ。ずっと俺のこと探していたようだけど、あのレストランで偶然見付けたって訳。それで、お礼を言っていたよ。明日、祐子も一緒にあのレストランに行こう。彼女、俺たちの友達になりたがっているんだ。みんなに紹介するよ」

賢は亜希子の感情の動きについては説明しなかった。祐子が悲しむと思

った。

「そう・・・あなた」

と言うと祐子は賢の左手の上に、更に自分の左手を重ねて強く握った。賢は祐子を抱き寄せた。夜の帳が下り、窓の外はもうすっかり暗闇になっていた。

翌日、賢は数馬と亮子に連絡を取り、午後6時にいつものレストランに集まるように伝えた。数馬は仕事の関係で遅くなるとのことだった。賢は少し早めに行ってみるのを待とうと思い、5時45分にレストランに着いた。中に入ると、既に亜希子が窓際の円形テーブルの端に座っていて、その脇に一人のウエイトレスが立って何か話をしていました。

「やあ、待った？」

賢はできるだけ気軽な感じで声を掛けた。立っていたウエイトレスは厨房の方に去った。

「こんにちは、わたくしの為にありがとうございます。わたくしもつい先ほど参ったばかりです」

亜希子は薄手の水色の地に紺の縦縞模様の入ったブラウスと、紺のプリーツスカートを着ていた。首には銀色のプラチナの縁取りがある深い群青色のサファイヤのネックレスをしていて、一層清楚さを感じさせる。

「今日はいつもの仲間が集まります。この間一緒にいた数馬だけは仕事で遅くなりますが・・・でも、できるだけ早く切り上げて来るとは言っていました」

「わたくしのために、すみません」

「いえ、あなたのような素敵な方が仲間に加わって頂けるので皆喜ぶと思います」

やがて、祐子と亮子と一緒に入って来た。

「賢くん、待った？」

祐子が明るい声で話し掛けた。亮子も賢に軽く会釈をした。

「いや、今来たばかりだよ」

ふたりが椅子に座ると、ウエイトレスが水の入ったグラスを4つ盆に載せて持って来て、グラスを置きながら「いらっしやいませ、後ほどまた

伺います」と言うと、注文を聞かずに厨房に去った。

賢が祐子と亮子に向かって話し掛けた。

「紹介するよ、藤代亜希子さんだ。祐子は知っていると思うけど、亮子は初めてだね。こちらは百新商事に努めている崎野祐子さん。そしてジュピター薬品に努めている谷川亮子さんです」

「藤代亜希子と申します。よろしくお願い致します」

「崎野祐子です。あなたとはこのレストランでお目に掛かっているわね。あなたのこと、賢くんから伺っています」

「初めまして谷川亮子です」

亮子の声は明るかった。賢は亮子に向かってさり気なく言った。

「身体、もう大丈夫？」

「ええ、おかげさまで、もうすっかりよくなったわ。皆にすっかり心配掛けちゃって」

「それは良かった」

祐子がそれをフォローするように言った。

「元気になったのよ。もう、大丈夫よ。あとは体重を元に戻すだけね」

「折角、スマートになったんだから、わたしこれを維持してゆくつもり」

賢が心配そうに言った。

「もっと、太らなきゃだめだよ。体力を付けなくちゃあ。随分痩せちゃったから」

「ありがとう。いつも賢くん、優しいね」

亮子が微笑みを浮かべて言った。

「ところで亜希子さん、自己紹介してほしいところだけど、数馬が来てからにしよう。その前に今いる3人は亜希子さんに、自己紹介しておこうか？」

「そうね。それがいいわ」

祐子が言った。亮子も頷いた。賢が話し始めた。

「じゃ、俺から始めるぞ。亜希子さん、俺は内観賢っていいます。現在WE C社の営業をやっています。もう直ぐ辞めますけどね。出身校はフェニックス大学理学部。静岡県の生まれです。独身です。趣味は旅行。

これまでに海外ではアメリカ、ヨーロッパ各地、シンガポールに旅行しました。国内の旅行は・・・まあこれはおいしい、話に出てくるかも知れませんが。長くなり過ぎてもいけませんから以上で終わります」

賢の隣に座っている亮子が次に話した。

「私は、谷川亮子と申します。現在ジュピター薬品に勤めています。26歳です。出身は水道橋女子大学文学部英文学科です。出身は埼玉県です。独身です。ただいま恋人募集中です。趣味は料理。得意はフランス料理です。将来は幸せな、静かな家庭を夢見しています。以上で終わります」

「私は崎野祐子と申します。丹波大学文理学部民俗学科の出身です。百新商事の社員です。25歳です。兵庫県の出身です。独身です。好きな人がいます」

亮子は賢の方を見た。賢は祐子を少し見て、亜希子に視線を移した。亜希子は微笑んでいた。祐子は続けた。

「趣味は民話と絵画。将来は愛する人とともに生きていければほかには何もありません。以上です」

賢は祐子の顔をじっと見た。祐子は顔をやや紅潮させた。亮子が言った。

「祐子、誰なの？私の知っている人？」

「秘密よ」

祐子は下を向いて言った。そのとき数馬が入って来た。数馬は少し急ぎ足で仲間の座っているテーブルに着くと

「やあ、遅くなってごめん」

と言って賢の隣に座った。ウエイトレスが水のグラスを持って来た。

「いらっしゃいませ、ご注文はどう致しますか？」

「あっ、済みません。何も注文しなくて」

賢がウエイトレスの顔を伺うように謝った。

「いいえ、亜希子さんが、お連れの方がお見えになるまで待つようにと仰いましたので・・・」

「そうだったのか。じゃ、みんなコーヒーでいいかな？」

賢の言葉に全員が同意した。結局コーヒー5個となった。

「かしこまりました」

ウエイトレスは直ぐに厨房に戻って行った。

「もう、みんな紹介し合ったのか？」

「丁度、お前の番さ」

「じゃ、改めて、遅くなって申し訳ありませんでした。ぼくは樋口数馬と申します。SHTシステム社に勤めています。ここの仲間とは2年前から付き合っています。趣味はサーフィンです。好きなものは車です。今、BMWに乗っています。会社には電車で通っています。将来は会社を経営したいと思っています。年齢は30歳です。ええと、何か話しくことあったかな？」

「出身を説明しろよ」

「あっ、そうか。福岡県の出身です。大学は南九州大学です。以上」

「これで全員、自己紹介したから、今度は亜希子さんの番だ」

「はい。わたくしは藤代亜希子と申します。24歳になったばかりです。このたび、皆様のお友達にさせて頂けることになりましたことに感謝致します。わたくしは昨年本州大学の文学部英文学科を卒業しました。東京の生まれです。家は青山で、両親と一緒に住んでいます。趣味は華道です。最近までアルバイトをしておりました。ご存じの通り一昨日まで、このレストランで働かせて頂いておりました。わたくしが是非皆様のお友達の端に加えて頂きたいと考えたのは、以前内観さんに命を救って頂いたことがあるからでございます。また、皆様がとても真剣に生きておられることを知ったため、是非内観さんのご友人である皆様とお付き合いしたいと思った訳でございます。以上で自己紹介を終わります」

祐子は亜希子のお話を聞いて、幾分嫉妬に似た感情を覚えた。数馬が賢い方に向けて問い掛けた。

「おまえ、亜希子さんを助けたことがあるのか？」

「うん、助けたという自覚は無いんだけど、亜希子さんはそう思っているようだ。8年前なんだけど」

「いえ、もし内観さんが救ってくださらなかったら、わたくしは殺される所でした。高校1年生の時、不良グループに誘拐されたのです。」

でもわたくしを助けてくださってから内観さんはそのまま、姿を消してしまわれました。わたくしはお礼も言わなかったことを悔やみ。あれからずっと、あちこちのお店でアルバイトをしながら内観さんを探していました。そして、この間ここで、内観さんにお会いできたのです」

祐子が嫉妬の感情を表に出さないようにしながら間に入った。

「それで、あなた、この間、賢くんのことをじっと見つめていたのね」

「はい、わたくし、やっと内観さんを見つけた嬉しさに感動していたのです」

亜希子は賢と一生、共に人を救ってゆきたいと思っていることは、口にしなかった。賢が話の方向を変えた。

「亜希子さん、実は俺たちの興味はいま、最近行方不明になった7人のことに向いているんだ。それぞれ違った切り口から、この事件を見つめてみようとしているんだ。君も加わる？」

「はい、わたくしも最近の世界の動きに何か尋常でないものを感じております。一見正常に見えるところに、亀裂が入ってきているような気がしまして・・・是非参加させて頂きたく思います。わたくしは人の幸せと不幸にとっても関心があります。この社会から不幸が無くなればいいと。わたくし、内観さんのアシスタントという立場でお手伝いさせて頂きたいと思っています。そういう形で参加させて頂いてもよろしいでしょうか？」

祐子が透かさず口を挟んだ。

「わたしたちはみんな協力し合っているわ。だから、特に賢くんのアシストを行う必要はないと思うわよ」

祐子は少し興奮気味に話した。賢は祐子があまり否定的になるのを抑えようとして言った。

「亜希子さん、君の考えるやり方でやってみるといいよ。俺の手伝いなんて考えないでさ。俺たちは皆、自分の信条に沿ってこの事件を見てみようとしているんだ。亜希子さんも君の考え方で、あの7つの事件を追ってみると面白いかもしれない」

亜希子は幾分不安そうな様子を見せた。それから暫くして、5人はレス

トランを出て分かれた。8時を少し回っていた。祐子を送って賢が祐子のアパートの方向に、亮子と亜希子を送って数馬が自分のアパートの方向に向かった。数馬は途中地下鉄の駅で亮子と亜希子を見送ってから、自分のアパートに帰った。祐子は自分のアパートに着くと、賢の方を振り向いた。

「ねえ、寄って行って」

「今日は帰るよ。ずっと祐子のところにいたから、ちょっとアパートに戻らなくちゃ」

「じゃ、9時まで、ねっ」

「分かった」

扉を開けて中に入ると、祐子は賢が入るのを待って鍵を掛け、賢に抱き付いた。

「あなた、亜希子さんのこと好きになっちゃだめよ。絶対だめよ。あなたは私だけのものよ」

賢は祐子を抱きしめながら

「おまえ、女郎蜘蛛になっちゃったみたいだな、ははは」

と笑った。祐子は真剣だった。

「ねっ、絶対だめよ」

「祐子、俺は神様に誓っているよ。俺たち、どこまで今の純粋な気持ちを持ち続けられるかだ。でも、ほかの人を愛するようになることもあり得る。たとえ誰を愛しても、絶対祐子への愛は変わらない」

「そんなのいやよ。私だけじゃないと」

「そんな、ダダをこねるなよ。お前も知っての通り、俺は全ての存在に対する愛を可能な限り拡大したいんだ」

「それは分かっているわ。でも、私を一番愛してね。私は一生の間、貴方しか愛さないわ」

賢は祐子の言っている愛の意味が分かった。

「うん、分かった。祐子、愛しているよ・・・」

ふたりは抱き合ったまま、よろけながら歩いてベッドまで来ると、そのままどっと倒れこんだ。

.....

祐子はまだ身動きせず目を瞑っている。賢は起き上がると、一度祐子の肩に手を回し唇に口付けした。そして祐子の肩を抱いて起き上がらせると、そっと抱きしめた。祐子は目を瞑ったまま賢にしがみ付いて「あなた」と言った。賢は祐子を抱き締めながら言った。

「祐子、心配するなよ。俺はこれから、あちこち旅行するけど、意識はいつもお前の側そばにいるよ。手紙を書くから」

「あなた、いつ出掛けるの？」

「明日で退社の手続きが完了するから、土、日で準備して月曜日から出掛けるつもりだ」

祐子はベッドから出ようとしなかった。

「あなた、もう一度抱き締めて」

賢は一糸纏わぬ祐子を強く抱きしめた。そして、祐子の手を引いて起き上がらせようとした。祐子は漸く起き上がったが、シャワーにも向かわず、ベッドの縁に腰掛けた。賢は祐子の隣に座った。

「祐子、今日は帰るよ。明日の夕方お前を迎えに来るよ。ふたりで消えよう」

「えっ？」

「ふたりでみんなの前から消えよう。そうすれば、みんなが、俺たちの関係に気付くさ」

「どこに行くの？」

「おれに任せておけ」

「わたし、そのまま永遠にあなたと消えてもいいわ。私を決して放さないで」

「俺が亜希子さんと同時に消えたとき、おまえ、気分悪かっただろう。今度はお前が俺と一緒に消える。ふたりきりで、2日間一緒に居る。誰も気付かないかも知れないし、誰かが気付くかも知れない。ただ、俺たちが意識して消えるということが大切さ」

「あなた」

祐子は賢の右手を胸に抱きこんだ。二人は再びベッドに倒れ込んだ。賢

は祐子を高め、恍惚感の中に誘導した。祐子はすぐに達した。足は力なく、ぐったりして動かなくなった。時々肩がぴくっぴくっと動いた。賢は静かな恍惚感に包まれていた。恍惚感の海の中で、そっと祐子から離れると祐子をベッドの上に仰向けに横たえたまま起き上がった。祐子はほとんど意識を失っていた。賢は祐子にそっとシーツを掛け、衣類を身につけた。鞆を手にし、祐子のアパートを出て合鍵で扉を閉めた。時計は11時を回っていた。祐子は賢の動きを意識していた。しかし、この恍惚感から抜け出したくなかった。賢が離れても、依然として賢が自分の中にいるという感覚だった。賢を思った。涙が頬を伝わって落ちた。歓喜の涙であった。祐子は生まれて来てよかったと思った。この瞬間が永遠に思えた。祐子は賢の存在を体全体に感じ続けた。体を洗いたくなかった。そして、そのまま眠りに落ちた。

賢がアパートに帰ったのは11時30分を回った頃だった。賢はずっと祐子を感じていた。体は離れたが、依然として一体であるという感覚を持っていた。祐子という母なる樹から流れ出た樹液に自分の全体が包まれているような感覚を覚えていた。賢は衣類を脱ぎ捨て、かばんを放り出して、ベッドに身を投げ出した。まだ続いている恍惚感に浸りながら、暫くの間瞑想した。心で「祐子、祐子、祐子……」と繰り返した。そして、そのまま眠りに落ちた。

翌日は、賢にとって10年間の会社勤務を終える日であった。朝礼で退職の挨拶をした後、部のメンバー一人一人を廻り挨拶をした。年上の者達からは、通り一辺倒な「君のような優秀な人材がいなくなることは、大変残念だ。健康に気を付けて、今後も活躍してくれ」というような応答が帰って来た。後輩達は恐縮したように「頑張ってください」と言っていたが、榎田雄三だけは、賢が退職することを心から残念がった。

「内観先輩、これからどうされるんですか？」

「すこし旅行を試してみようと思うんだ」

「そうですか。また、新しい仕事をされるのであれば、是非僕にも声を掛けてください。それから、先輩、一度祐子さんを紹介してくれる約束でしたよね」

「そうだったかな。それじゃ、今日崎野さん呼び出すから、附いて来いよ。紹介するよ？」

賢は祐子にメールを送った。

「崎野さん

内観です。

今日、いつものレストランで、6時にお会いしましょう。その時一人友人を紹介します。

では、待っています」

祐子からも、すぐに応答が帰って来た。

「内観さんへ

崎野より

了解しました。必ず伺います」

メールの内容は極めて簡単なものだ。いつも連絡を取り合うときは、誰に見られても疑念を抱かれない様に、個人的な感情は書かないように配慮した。これは賢と祐子の間で、暗黙の了解事項になっていた。夕方までに退社の手続きは完了した。賢はこれまで業務に関係した社内の人たちに電子メールで挨拶状を送った。送信が完了すると、自分のPCをネットワークから切断し、IT担当者にPCの所有権を返還するため、必要事項を記入した申請書を社内便で送付した。

就業時間が終わると賢は榎田とともにいつものレストランに向かった。

6時前であったが、既に祐子は来ていた。赤に黒いサイケデリックな花模様の入ったノースリーブのワンピースを着ていた。首には貝殻を繋いだネックレス、耳には小さな3個のダイヤモンドをあしらったシルバーのイヤリングをして、髪は左側でまとめて縛り、濃い黄色のハイビスカスの花を飾っていた。髪の手が左肩から胸の膨らみに掛かっている。美しく、健康的で、それでいて艶かしい妖艶さを醸し出していた。

「祐子、待たせちゃった？」

「ううん、今来たばかりよ」

確かに、その通りのようであった。ウエイトレスがやって来て注文をとったからだ。賢と祐子はコーヒーを注文した。榎田はふたりと同じもの

を注文したくなかった。

「僕は、コーラをもらおうよ」

ウエイトレスが厨房に向かった時、賢が櫛田に向かって

「俺の最愛の友人崎野祐子さんだ」

と言ってから、祐子に向かって、

「祐子、元の職場の仲間櫛田さんだ。是非紹介してくれって頼まれたんで」

と言った。祐子は賢が使ったいつもと違う言葉に少し顔を赤らめて、

「崎野です。内観さんにはいつもお世話になっています」

と言って、自分の言った言葉がこの場に相応しくないかも知れないと思った。

「以前から、是非あなたの友人のひとりに加えて頂きたいと思っていました、厚かましいとは思いましたが、先輩が今日で退社されちゃうとのことだったので、無理を言ってお願いしてしまいました」

「そういう訳なんだ。彼は若くてバイタリティがあるし、会社にとっても有望株なんだ」

「不躰でもうしわけありませんが、立ち入ったことをお聞きしてもよろしいですか？」

「何でしょう。あまり個人的なことでなければ」

「いいえ、崎野さんは今、誰か特別な人がいますか？」

「はい、内観さんがいます。特別な友達です」

祐子は恋人という表現は使わなかったが、櫛田にはそれと感じられた。

「先輩は旅行に出られるとのことですから、何か先輩の留守の間に困ったことがあったら、連絡してください。僕にできることなら何でもお手伝いします」

「祐子、良かったじゃないか。櫛田なら誠実だから、困ったときは助けしてくれるだろう」

祐子は賢がそういうのを聞いて不満だった。拒否して欲しかった。しかし、その気持ちとは裏腹に、

「その節は、よろしくお願ひします」

と言った。

「今日は祐子と一緒にまとめなければならぬことがあるんで、俺たちはこれで失礼するよ」

「はい先輩、崎野さん、無理を言って申し訳ありませんでした。ありがとうございました」

ふたりは櫛田を残してレストランを出た。櫛田は気を利かせるつもりで、そこに残った。ふたりは暫く黙って歩いた。祐子は賢に行き先を聞こうとしなかった。賢は祐子の方を向いてさらっと言った。

「今日はとても綺麗だよ。祐子にはハイビスカスの花が似合うな」

「今日は特別の日でしょ。一寸恥はなかんざしずかしかったけど、花簪はなかんざしを付けてみたの」

祐子は賢の言葉に喜びを押さえられず、笑みを浮かべて応えた。大通りとの交差点に差し掛かったとき、賢はタクシーを止めた。ふたりはタクシーに乗り込んだ。

「どちらまで」

「ホテルニュー四谷、お願いします」

「分かりました」

それから30分ほどして、タクシーはホテルニュー四谷のエントランスに横付けした。都内でも外国人の客が多く宿泊することで有名な、5つ星にランキングされているホテルである。

タクシーを降りると、賢は祐子を伴ってチェックインカウンターに向かった。

「内観ですが、チェックインをお願いします」

「内観賢様ですね」

係の女性は手元のキーボードを叩いた。

「お二人様一部屋でご一泊でございますね。お部屋は10階の1075号室になります。お荷物はございますか？」

そう言って女性は鍵を賢に渡した。賢は「いいえ、ありません」と応えた。係の女性は支払いについて一切触れなかった。賢は一流ホテルだと思った。祐子は胸の鼓動が激しくなってくるのを覚えた。ふたりはエレ

ベータを10階で降り部屋まで歩いた。祐子は賢の少し後から附いて行った。部屋に入ると自動的に照明が点いた。入り口から部屋までのアプローチに大きな鏡が配置されていて、その横にクローゼットとバスルームへの扉が配置されていた。祐子は鏡で自分の姿を確認した。可愛い着こなしだと満足した。祐子が鏡から目を離すと、賢が鞆を放り出し、祐子の左手を掴んで引き寄せ、抱きしめた。祐子は「あっ」と小さな声をあげたが、すでに賢の腕の中に抱かれていた。祐子のバッグも手から滑り落ちた。

「今日は特にかわいいよ」

賢は祐子に口づけをした。

祐子は身体の中に熱い血が流れるのを覚えた。

「祐子、今日俺たちはずっと目覚めていよう。ふたりとも自分自身が無くなるまで、ずっと愛し合おう。そして完全に一つになるんだ。時間を掛けて、そして」

「恥ずかしいわ。あなた。私はここ毎日、あなたに抱かれていってしまっているわ。もう自分一人の身体じゃないの、いつもあなたが中にいるの。でも、心にはまだ、あなたが誰かのところに行ってしまうのか、不安が残っているけど」

「もう少しだな。抱かれている、抱いているという感覚が消えるまで愛し合うんだ。そうすると究極の愛の姿が現れるって謂われている。俺は、祐子とならできると思う」

「分かったわ。身も心もすべてが一つになるのね」

「そう。でも、そうしようとしてはだめだ。そうなるまで続けるんだ」祐子は賢に強く抱きついた。賢も祐子を一層強く抱きしめた。そして、ふたりは再び口づけを交わした。少しして、ふたりは離れ、祐子がバッグと鞆をそっと拾ってテーブルの上に置いた。ふたりはホテルを出て、レストランで食事をすることにした。タクシーでフロントの男性が奨めた中華料理店に行った。食事をしながらふたりは4番目の事件について語り合った。賢はつい先ほどホテルの部屋で祐子に話したことなど、まるで忘れてしまったように話した。

「祐子、赤谷洋一郎さんの言っていたことどう感じた？」

祐子も賢のそんな話し方を受けとめて応えた。

「赤谷さんって、無口な感じね。あまり話さなかったように思うけど、何か特別なこと言っていたかしら？」

「うん、海の老人っていう人のことを話していたよな。確か、みんなが出雲大社を参拝しているときに、あの消えた江川勝児さんは一人分かれて海の老人に会いに行ったって」

「ああ、そうだったわ。わたし、あの海の老人という名前を聞いて、私が隅田川の川岸で会ったあの老人を思い出したの。あなた覚えているでしょう、あの「鳥との触れあい大会」の時、最後に出て来た老人。私、あの人と言葉を交わしたのよ。本当に賢くんのこと知っているみたいだったわよ」

「この間もそう言ったな。だけど俺には以前にあの人に会ったような記憶は無いよ」

「あの老人と会っていると、わたし、心の動きを見られているような感じがするの」

「海の老人とあの老人と関係あるのかな？」

「そうそう、あの老人、隅田川の中の魚の様子が分かるようだったわ」

「ふーん。そんなこと聞くと、やっぱり海の老人って謂われている人と関係あるのかな」

ふたりが食事を終えて再びタクシーで部屋に戻ったのは8時を回った頃だった。部屋の奥は全面の窓になっていて、街の灯りの煌きが映し出されていた。賢はカーテンを引いた。窓の側には二人掛けのソファを挟んでテーブルが置かれていた。奥の壁際にキングサイズのベッドが2つ並んでいて、二つのベッドの間には時計のセットされた化粧台が置かれていた。ベッドの反対側には、さっき祐子とその上にバッグと鞆を置いた2メートルほどの造り付けテーブルがあり、ヨーロッパ風の刺繍のしたあるクロスを張った椅子が2脚置かれている。テーブルの脇にはイタリア風のチェストが置かれていた。壁には小さな照明が付いていて、部屋全体の落ち着いた演出するのに一役買っている。賢は腕時計を外し、

ポケットから財布とハンカチを取り出してテーブルの上に置いた。祐子も近づいて来て賢の左手にそっと触れてから、時計とイヤリングを外し、賢の財布の横に並べて置いた。

「一緒にシャワーを浴びよう」

「うん、でもちょっと恥ずかしい」

祐子はそう言ったが、静かにクローゼットに近づき、靴を脱ぎ、衣類を脱ぐと中に収まった。賢も靴を脱いでから、祐子の横から身体を傾けてハンガーをとり、背広とワイシャツを脱いで掛けた。ふたりは下着だけの姿になった。賢はクローゼットの扉を閉めるとバスルームの扉を開けた。そこは3畳ほどもある化粧室になっていた。グレーの大理石の化粧台の中央に、大きなオパール色のシンクが埋め込まれていた。シンクの前は全面鏡張りになっていた。中に入ってシンクから少し離れて立つと、全身が映し出された。祐子がハイビスカスの花を手にして、静かに入って来た。賢は下着を脱いだ。祐子はハイビスカスを化粧台の上に、そっと置いて、身につけているものをすべて外した。賢は祐子の左手を取ってバスルームの引き戸を開けた。広いバスルームだった。一番奥に、全身を伸ばしてもまだ余裕があるほど長く、幅も二人並んで入れるほどのダークグレーのバスタブがあった。

入り口のすぐ左手には便器とフィンガーボールが設置されており、バスタブと便器の間にはスモークのかかったガラスの仕切り板が宙に浮いたように設置されていて、便器と浴槽に別の空間を与えていた。バスタブの横には固定されたシャワーとノズル式のシャワーの二つがセットされていた。賢は化粧台に置かれているボディソープとシャンプーを左手にとり、バスルームの扉を開いてから、右手で祐子の手を引いて中に入った。祐子は全く、賢のするままになっていた。賢は手のものを壁の小物置きに置くと、祐子の手を離してシャワーのコックを捻った。いきなり、水が噴き出して来た。賢は頭から水を被った形になった。しかし、水の冷たさが気持ちよかった。賢は温度を調節して、祐子の右手を取ると、静かに引き寄せた。シャワーの水は少し温かくなった。水をノズル式シャワー側に切り替え、壁に掛かっているノズルを右手で取って、先ず自

分の身体をさっと流してから、祐子の身体にシャワーを掛けた。

「祐子、先にシャワー浴びていいぞ。シャンプーとソープはそこにあるよ」

「ありがとう」

そう言うと、祐子はシャワーの前に身を寄せた。

賢は少し離れて、バスタブの縁に腰掛けて、祐子のシャワーを使う姿を見つめた。祐子が髪を濯ぎ、身体を洗う姿は美しかった。少し首を下げて髪を梳き上げるときに見せるうなじから腕に掛けての線が、黒田清輝の美人画に描かれている女性の姿を連想させた。祐子の後ろ姿は腰のくびれから臀部の盛り上がりまで、西洋の彫刻で見る女人像のごとく均整がとれている。暫くして、祐子はシャワーを終えた。賢は手早く髪を洗い、自分の全身を洗った。賢がバスルームから出ると、祐子は化粧室でバスタオルを胸から下に巻き付けて、別のタオルで髪を拭いていた。賢も身体を拭いた。ふたりは顔を見合わせて微笑んだ。賢は祐子を引き寄せて抱きしめた。祐子はそっと賢に応えた。賢は心の中で、「祐子と一体にさせてください。永遠の愛を無限に広げさせてください。今日は祐子の身体に私たちの子供の魂が宿りませんように」と祈った。祐子の顔は紅潮していたが、透き通るほど美しかった。賢に喜びの感情がこみ上げて来た。ふたりは身体を寄せながらベッドに身を投げた。

およそ2時間が経過した。ふたりの意識ははっきりしていた。静かな恍惚感が時々押し寄せて来ては去って行った。賢は祐子の愛撫を続けた。時々祐子がびくびくっと動いて、大きく吐息を吐いた。やがてまた1時間が経過した。賢は祐子の髪を撫で、唇に口づけした。そして、少し激しさを増した。祐子は賢にしがみ付いた。祐子の声が漏れだした。賢はまた、動きを緩やかにした。祐子の半眼の脛に涙の滴が現れ、その滴はだんだん膨らみ、小豆の粒のようになって割れ。両の目尻から耳に向けて流れた。賢は祐子の腰を抱いて引き寄せ、そのまま動かずに祐子の唇に口づけをした。賢の背に回した祐子の手が力が籠もった。ふたりは唇を合わせたまま10分ほど動かなかつた。ふたりの口元からは涎よだれが流れ出た。ふたりはそれでもそのまま抱き合っていた。やがてふたりは向

き合う形になった。賢は自分達が結びついているのを見た。祐子は目を瞑っていたが、意識だけはなんとか保っていた。1時間ほどして、ふたりを恍惚感の波が襲った。祐子は小刻みに震えた。賢は動きを全く止めて、やっとのことで爆発をこらえた。それから10分間ほどじっと耐えた。また、静かな快感がふたりの身体を満たした。祐子は自分の身体が溶けてゆくような感覚を覚え始めた。その落ちてゆくような感覚に抵抗した。賢は快感が局所から身体全体に広がってきているのを意識していた。その感覚は次第に全身に行き渡り、指先から髪の毛一本一本に至るまで広がっていった。祐子は自分の血液が恍惚を伴って全身を巡っているのを感じた。もう、時計は4時を廻っていた。賢は少し動きを早めた。自分で意識している行為ではなかった。身体が自然に動いていた。突然祐子の目の前に青空が広がった。そして、その青空に鳥たちが羽ばたいていた。自分がその青空に溶けてゆくのが分かった。自分が溶けてゆくと青空に一つの黄金色が広がった。そして、もう一つの別の黄金色が広がっているのが分かった。その二つの黄金色が青空全体に広がり、いつしか空全体が黄金色に変わった。すべての存在が見えた。そのすべての存在が自分だと感じた。祐子の目から涙が止めどなく流れた。祐子の身体は賢にしっかり抱きついていていた。賢の目の前に海が広がった。海面は波一つ無く青い空を鏡面の様に写していた。賢はその海の水に自分が溶けてゆくを感じた。自分が溶け出した海水は黄金色の水に変わっていった。遙か彼方に光が灯っていた。その光は次第に近づいてきた。その光を受けて、海の色が黄金色に変わってきていた。二つの黄金色は次第に広がり、やがて一つになろうとする時、光が目に見えないほど強く輝いた。賢は自分自身が喜びの中で完全に解け去ったのを感じた。その衝撃波で一気に海全体が黄金色に変わった。賢は祐子の中で達した。それでも終わったという感覚は無かった。海の中に数え切れなくらい沢山の、さまざまな種類の魚が見えた。世界中のすべての存在が見えた。次から次に織りなす存在の現れに圧倒された。すべての存在が愛おしくなった。賢の頬を涙が伝わって祐子のほほに落ち、祐子の目から溢れ出ている涙と一つになった。賢は祐子の身体を抱き締めていた。ふたりの意

識は醒めていた。すべてがはっきり分かった。ふたりは目を閉じていたが、すべてが見えた。賢は祐子がこの上なく美しく、そこに横たわっているのを見た。祐子は賢がこの上なく逞しく、優しく自分を抱いているのを見た。ふたりはそれからおよそ2時間の間、動かずにいた。すべての存在が映像として自分の中に映し出されているのを見た。変化してゆくものがこの上なく美しく見えた。ふたりは喜びの中で感謝と感激の涙に打ち震えた。そして、ほとんど同時に眠りに落ちた。気付いた時は8時を回っていた。賢は静かに起き上がり、祐子から離れた。そして祐子を抱き起こした。祐子は静かに起き上がり、賢に抱き付いた。頬を涙が流れた。賢は祐子の頭を抱きかかえた。ふたりは無言で抱き合った。賢はタオルを取るとそっと祐子の身体を拭いてあげた。祐子の顔には涙の跡がくっきり残っていた。

「シャワーを浴びてチェックアウトしよう」

賢が言った。祐子は涙が止まらなかった。黙って首を縦に振った。賢は祐子の手を引いてバスルームに行き、身体を流してやった。祐子の身体は美しかった。昨日とは違う美しさがあった。シャワーを浴びると賢はバスタオルで祐子の身体を優しく拭いてあげた。裸のままふたりは抱き合い、深い口づけをした。

「あなた。わたし、あなたと一つになれた」

「おれもだ。祐子、俺たちはもう何処にいても一つだ」

「あとで、どんな風になったか教えて」

「うん。おまえもな」

部屋を出たのは9時を少し回った頃だった。賢はチェックアウトをした。祐子は少し離れて待っていた。ふたりは朝食を摂る為にロビーの奥のレストランに入った。朝食は席を自由に選べた。奥の角の席を選んだ。ほとんどの客が入り口に近い席を選んでいて、祐子は人の気配の無いことを意識しながら、

「私、空そらになったの。空が金色に染まったわ。そこにもう一つの光が見えたの。その光も金色に広がっていったわ。それがあなただって分かったの。私が消えて、一面金色の空になったわ。私とあなたの境界線が無

くなる時、強い光が輝いたの。私は何処にもいなかったけど、その空が自分だって分かったの。空には鳥たちが飛んでいたわ。空の^{もと}下にすべての存在があったわ。とても美しかった。私は生まれて来てよかった。あなたに遭えたもの」

そう言うと祐子は涙ぐんで、ハンドバッグからハンカチを出し、そっと目に当てた。賢には祐子が輝いてくるのが分かった。光が次第に強くなって、目を開けていられないほどだった。その光に立ち向かうように賢が話し始めた。

「おれは海になった。経過は大体祐子と同じだ。やはり金色だ。金色の光の玉が現れたんだ。おまえだよ。全体が金色に変わるとき光が煌いた。俺はその時果てたんだ。その時おまえと解け合っただけ感じた。でもいつもと違って、身体の細胞一つ一つが反応していた。もう、自分というものが無くなっていて、全てを愛し抱擁している海がそこにあった。すべてが映像だと分かった。それもこの上なく美しい映像だ。祐子、おれもおまえに逢えて、生きて来た甲斐があった。もう、絶対に離れることはない。何処にいても。これから、肉体も、心も時間と共に変化してゆく。だけど、意識は変わらない。永遠に」

「心は変わっちゃうの？」

「心は、純粋な状態を保てば、今のままさ。意識が心を支配できればね。祐子、俺の心は今のままさ。永遠にな」

「わたしだって、絶対変わらないわ。今のままよ」

ふたりは朝食を済ませて外に出た。外は真夏の日差しが強かった。ふたりは満たされていた。

「あなた、私を連れて来たのはこの為だったのね」

「うん、暫く会えなくなるだろう。その前にと行って」

「私を唐人お吉にしないでね」

「えっ?!」

大山

賢が出雲空港に着いたのは2日後の月曜の朝である。出雲空港は田んぼの中にぽつんと出来たローカル空港というイメージだった。賢は1週間の滞在を想定して、一泊目を近くの玉造温泉に決めていた。この辺りでは最も名の知れた温泉街である。ここなら、何処に行くにも不自由は無いだろうと考えての選択だった。バゲッジクレームでスーツケースを取り上げて出札ゲートを出た。タクシー乗り場を探していると後ろから賢を呼び止める声がした。賢が振り返ると、そこには巫希子がいた。

「巫希子さん。どうしてこちらに？」

「わたくし、賢さんのお手伝いがしたくて、附いて来ちゃったの」

巫希子は右手でキャリングローラー付きの黒のトラベルケースを引いて、左手の腕にベージュのハンドバッグを掛けていた。薄緑色の襟に白いフリフリの付いた薄手のシャツと、明るい灰色のパンツ、スニーカーはやはり清楚な印象を与えた。

「どうして、僕の計画が分かったんだ？」

自分の計画を知っているのは祐子と数馬だけのはずだった。

「数馬さんに伺ったんです」

賢は納得した。昨日数馬から鹿児島島の原智明のことについて電話があった。原智明研究会から東京に拠点を持ちたいので、数馬に力になって欲しいとの連絡を受けたということ伝える電話であった。賢は一週間ほど山陰に出掛ける話をした。その時、数馬に月曜の朝出雲に入り土曜の夜羽田に戻ることを告げたのだった。

「わたくし、今朝あなたのこと羽田でお見掛けしましたので、確信を持ってましたの。でも、羽田では話し掛ける勇気が無くて・・・すぐ同じフライトのチケットを手に入れて附いて来てしまいました。お邪魔は致しませんからどうか許してください」

賢はすぐ心を開いて受け入れた。

「ご両親には何と言って来たのですか？心配されるでしょうに」

「母に、友達と山陰に旅行すると言ってまいりました。両親はわたくしを信用していますから」

「僕は、自分の自由に行動しますが、それでもよければ構いませんが」

「はい、わたくしはそのつもりでまいりました。少しでもお役に立ちたいと思って」

その時、ガチャーンという大きな音がして、空港の外のアプローチ通路に急に人だかりが出来た。

「なにかしら」

賢は直ぐにそこに向かった。人だかりの真ん中に一人のみずぼらしい身なりの老翁が一本の杖を手にしてしゃがみ込んでいた。その横には手荷物用のカートが倒れていた。カートの横にはそのカートに乗せていたと思われるスーツケースが半開きになって転がっており、中から出たと見られる衣類や洗面用具が散乱していた。一人の50歳くらいのビジネスマン風の男性が、腰を曲げて散乱したものをかき集め、スーツケースの中に戻していた。全ての物を押し込んで、スーツケースを閉めると、男は言った。

「爺さん、危ないじゃないか。いきなり杖を出すから、見ろよ、こんなことになっちゃって。気を付けろよ」

そう言うと、その男はカートを起きあがらせ、スーツケースに傷が付いてないかどうか確認をして、エントランスからさっさと空港ビルの中に入って行った。

集まっていた物見衆も程なく散って、賢とその側に立っている亜希子のふたりだけが残った。老翁は大分風呂に入っていないようで鼻を突く異臭をまき散らせていて、2メートルほど離れた賢や亜希子の位置からもそれが分かった。賢は老翁に近付くと顔を覗き込んだ。

「大丈夫ですか？怪我はありませんか？」

老翁は気だるそうに膝をさすりながら言った。

「足を打ったみたいじゃ。それでなくても弱っているのに、まったく酷いやっちゃ」

「歩けますか？」

老翁は杖を使って立ち上がろうとしたが、「いてて」と言ってまた座ってしまった。賢は老翁の足に触れた。汚れて白っぽくなっている紺色のズボンを穿いている。賢はそのズボンをたくし上げた。足は思いの外

しっかりしていて、とても老人の足とは思えなかった。右足の膝が擦り剥けて少し血が滲んでいた。賢は自分のスーツケースを開けると中からバンドエイドを取り出し、老翁の右膝に貼って膝の回りを軽く押さえてみた。老翁は特に反応しなかった。賢は擦り傷だけと思い、老翁のズボンの裾を元に戻して言った。

「どこか、痛いところありますか？」

「わしゃ、いつも痛いところだらけじゃ。いま、どこをぶったかも分からんだぜ」

賢は老人を立ちあがらせた。老翁は賢の右肩に左手を掛け、右手で杖を支えに何とか立ち上がることができた。老翁は口をもぐもぐさせながら、そのまま、杖を突いて歩き始めた。賢は暫く見守っていたが、亜希子の方を振り返り、

「泊まるどころ決まっているのか？」

と聞いた。

「まだ、決めていません。できるだけ内観さんのホテルの近くに宿泊したいと思っていますが」

「俺は玉造温泉の花の屋旅館に泊まるけど、今の内に予約を取っておいた方がいいぞ」

「内観さん、少し待っていてくださいますか？空港の旅行案内に聞いて来ます」

亜希子は駈けるように再び空港のロビーに入って行った。10分ほどして亜希子は戻って来た。

「お待たせしました。わたくしも内観さんと同じ旅館が取れました。よろしく願いいたします」

「そうか、よかったな」

賢は薄い灰色の半袖のTシャツとビジネスタイプのズボンを穿いている。

「内観さん、シャツの右肩が汚れてしまっています」

亜希子がそう言って、自分の白いレースのハンカチを取り出し汚れを拭いた。しかし土の粉のような汚れは残った。

「ありがとう。まあ、今日はこのあと、出雲大社とその近くを廻るだけだから、このままでも何とかなるよ。それより君のハンカチが汚れてしまったな」

「ハンカチは替えがありますから」

ふたりはタクシーで出雲大社に向かった。参拝者用の駐車場はかなり広々していた。月曜日の朝だけあって、奥の隅に2台の車が停めてあるだけでまったく閑散としている。ふたりはそこでタクシーを降りた。駐車場の出口付近に土産物店があり、その隣に1件の喫茶店があった。賢が亜希子に言った。

「その喫茶店で今日の計画を説明するよ。俺が何をしているか分からなかったら君もつまらないだろう。それに別行動をとったとき、君のことが心配だからな」

「はい、済みません。わたくし、足枷にならないように気を付けます」
ふたりは喫茶店に入った。小さな店だった。店員の姿が見えなかった。賢が声を掛けると、店主のような50歳代半ばほどの年格好の男性が出て来た。ふたりはアイスコーヒーを頼んだ。

「今日は、まず出雲大社を参拝してから、土産物店で民話集を手に入れるつもりだ。その後が少し大変だけど、一人の老人について調べてみようと思うんだ。出雲大社から海岸までの地域を、人の多く行き交う処で聞き込みをして廻ろうと思う。もし君が手伝ってくれたら助かるよ」
賢はスーツケースのサイドポケットから1枚の地図と写真を取り出した。地図をテーブルの上に広げ、出雲大社の位置を指さして言った。

「ここが今いる処だ。この辺りを調べたいと思う。別行動をとるときは、待ち合わせ時間を決めておこう。この写真が大山の山中でバスが転落したときに消滅した江川勝児さんの写真だ。そして、その江川さんがここで「海の老人」という人に会ったようだ。おれはこの江川さんを見掛けたか、海の老人のことを知っていないかどうか訊いて廻って、何か情報を得ようと思うんだ」

そう言って、亜希子に笹倉佳代から貰った写真を見せた。その写真はツアーの参加者全員の記念写真から江川だけを拡大して1枚のL版に焼き

付けたもので、顔の輪郭がぼけていた。亜希子は自分のハンドバッグからスマホを取り出した。

「内観さん、この写真を撮っておいてもよろしいですか？」

「ああ、そうだな。君と別々に調べた方が効率的だからな」

亜希子は江川の写真を撮影した。ふたりは喫茶店を出て、隣の土産物店に入った。「後で買い物をする」と約束して、そこにふたりのスーツケースを預けた。ふたりは身軽になって大社を詣でた。正面に巨大な注連縄しめなわの張ってある正門が見えた。その下で3人の子供が10円硬貨を注連縄目掛けて投げて遊んでいた。賢と亜希子はふたり一緒に参拝した。賢はすべての人への愛と祐子への愛を誓い、感謝の祈りを捧げた。亜希子はすべての人の幸福と賢への永遠の愛を誓った。参拝を済ませた後で賢が言った。

「大国主命は愛情豊かだったんだよな。特に女性に対して」

「そうなんですか？」

ふたりは境内を一周した。賢は社務所の売店でスマホ用のお守りを4つ買い、それぞれ袋に入れてもらった。そして、その中の一つを亜希子に渡した。亜希子は嬉しそうにそれをパンツの右のポケットに入れた。参拝を終えると、ふたりは先程の土産物店に入った。40歳前後の婦人の店員が3人いたが、客は一人もいなかった。二人の店員が賢と亜希子のスーツケースを一つずつ手にして近付いて来た。もう一人の店員は店の別の入り口に立ってふたりを見つめていた。賢の荷物を引いて来た店員が言った。

「いらっしゃいませ、先ほどのお客様ですね。ご新婚さんでいらっしゃいますか？」

亜希子は顔色が紅潮するのを覚えた。賢が応えた。

「いえ違います。一寸調査に来たんです。先ほどは荷物を預かって頂き、ありがとうございます。ところで、この辺りの民話や神話の本を置いていますか？」

店員は頷くと、店の奥に行った。

亜希子はもう一人の店員に促されて、民芸品のコーナーに行った。少し

して、初めの店員が民話集、神話集、出雲の国風土記の3冊の小冊子を手にして戻って来た。賢は民話集と出雲の国風土記を買った。そして、近くのガラスの陳列ケースの中ほどに飾ってあった7粒の真珠をあしらった髪飾りを指さした。その髪飾りを付けた祐子の姿が脳裏に浮かんだ。

「それは本真珠ですよ。赤い色がとてもきれいでしょ」

そう言いながら店員は、髪飾りを陳列ケースから出して賢に渡した。

賢は亜希子が別の店員と話している間にそれを買った。全部で3万円を支払って、小銭の釣銭を受け取りながら店員を訪ねた。

「すみません、この辺りで海の老人と呼ばれている人のことご存じありませんか？」

「さあ？・・・この辺の人のことなら、もしかしたら物知りのよしこさんが知っているかも知れないわね。あそこでお連れさんと話しているのがよしこさんですよ」

「ありがとうございます。それからこの人のこと記憶に残っていませんか？」

そう言うと、賢はシャツの胸のポケットから江川の写真を取り出して店員に見せた。

「そうね、いろいろなお客さんが来るから・・・この人どういう方で？」

「今年の10月にあの大山でバス転落事故があったでしょう。あの時、行方不明になった人ですよ」

「ああ、あの人ね。わたしゃ分からないな」

賢は店員にお礼を言って亜希子の側に行った。亜希子がスマホの画像を見せながらよしこさんにいろいろ質問していた。

「それでは、あの事故のあった前の日にここにお寄りになったのでしょうか？」

「いいえ、ここには寄りませんでしたよ。確か、どこかのお爺さんと一緒に歩いていましたね。それが、普通は若い人が年寄りの手を引くでしょう。この写真の人、すごく遅く見えたのに、そのお爺さんに手を引かれて後から歩いていたんですよ。その姿があんまり奇妙だったんで、

わたし、ずっと見ていたんですよ。それしか覚えてないんですが」

「その老人のことはご存じありませんか？海の老人って呼ばれているんじゃないかと思うのですが」

「海の老人ね。なんか聞いたことあるわね。そうだ、日御碕で聞いてみるといいわよ。あそこには家の息子がよく行く濱屋って釣り道具を売っている店があるから、何か知っているかもね」

ふたりは店員にお礼を言って店を出た。時計は12時を回っていた。

「亜希子さん、お腹がすいただろう。まず食事をしようか？」

「はい、ここで済ませたほうが、よろしいと思います」

ふたりは近くの蕎麦店に入り、出雲蕎麦を注文した。5皿ずつ頼んだ。

「この蕎麦はおもしろい盛り付け方をするんだね」

「はい、わたくしは出雲蕎麦が大好きです」

賢は亜希子がよく知っているので感心した。

「亜希子さん、君が話していた店員さん、なんか面白いこと言っていなかった？」

「はい、「この辺りには時々不思議なことが起こるよ」って言っていました。「それは伯神様がなさっておられるんだ」って。伯神さまって、大国主命のことかしら」

「どうかな。ここには素箋鳴尊すきのみことの話が残っているんだよ。「八雲立つ出雲八重垣妻籠に八重垣作るこの八重垣を」って唄知っている？この唄を唄った神様が素箋鳴尊で、俺はどちらかというところの荒ぶる神様すきのことじゃないかって気がするな……一寸横道に逸れたけど、どんな不思議なことがあるんだって？」

「神隠しみたいなことや、巡り合わせみたいなのが起きるみたいなんです」

「神隠しは分かるけど、巡り合わせってのは？」

「なんでも、この土地で巡り遇った人達は一度別れ別れになっても、必ずまたどこかで巡り逢えるっておっしゃっていました。その巡り合わせを伯神さまがなさっているんだって仰っていました。恋人同士も、結びつけてくれるようなのです」

亜希子は賢の目を覗き込んで微笑んだ。賢は亜希子の澄んだ瞳にいたずらっぽさを感じたが、あの引き込まれるような感覚は覚えなかった。

食事を済ますと、ふたりはタクシーに乗って日御碕の濱屋に向かった。

「いらっしやい」

濱屋の主人は威勢よくふたりを迎え入れてくれた。ふたりがスーツケースを持っているのを見て言った。

「新婚旅行でやんすか？釣りでななさるおつもりで？」

「いいえ、済みません、一寸お伺いしたいことがございまして」

「何がね？」

「海の老人と呼ばれている人のことはご存じないでしょうか？」

「海の？なんて言ったがね？」

「海の老人です。お爺さんですけど」

「そう言えば、前に時々お客さんが、「魚の動きがわかるじいさんがおる」なんて言ってたことがあったがな。その爺さんがおる時はコマセもいらんと皆言っとる。最近は何も聞かんだが」

「そうですか。もしかしたら、そのおじいさんが海の老人かもしれません。釣り人はどの辺で釣りをするんですか？」

「この先の日御碕だがね。岩場だけね、よーく釣れるがね。ここからじゃ歩いて10分くらいじゃで。だけんど、あんたらその荷物じゃ無理だな。行くんじやったら、荷物預かってやってもええがね」

賢は一番安い釣り竿と、釣り道具を1セット、それに麦わら帽子二つとミネラルウォーターのペットボトルを2つ買った。しかし餌は買わなかった。店主は賢が餌を買わないことを特に不思議にも思ってもいないようだった。賢は赤いリボンの付いた麦わら帽子を亜希子に渡し、自分は青いリボンが付いた方を被った。亜希子は賢の優しさに胸躍った。ふたりは店主が教えてくれた道を日御碕に向かって歩いた。午後の日差しは殊に厳しかった。亜希子が言った。

「内観さん、どうして釣り竿を買われたのですか？」

「あの店の主人にいろいろ伺ったし、荷物も預かってくれたから。それに釣りをしている方が、その老人に会える可能性が高いように感じたん

だ」

「そうだったんですか」

ふたりは程なく日御碕の海岸に着いた。釣り人は一人もいなかった。灯台が夏の日差しを受けて、辺りに暑さを撒き散らしているように思えた。強い陽光が海の波に反射して、時々ふたりの目を眩ませた。ふたりは木陰を捜した。幸い、松の木が覆い被さっている岩陰を見つけた。賢は自分のポケットからハンカチを出して平たい磐の上に敷き、その上に亜希子を座らせ、自分は少し離れた丸い磐に腰を下ろした。そこからは海が一望の下に見えた。日本海はこんなに晴れているときでも波が高かった。賢は釣り竿を繋ぎ、糸を結び、錘を付けた。釣り針は付けずにそのまま海に向かって糸を垂れた。日差しが一層強くなってきたように感じられた。賢は無言で糸を垂れていた。海の彼方に明るい光が輝いている。その光の中に祐子の姿が浮かんで来たように感じた。自分の身体感覚が無くなってゆき、海に溶け込んでいくようだ。空の上から心地よい青さが降りてきて、海になった自分を覆うような感覚を覚えた。はっと気付いて、亜希子を見ると亜希子は自分をじっと見つめていた。亜希子の視線がこの上なく優しく感じられた。それは今感じた空の感覚に近かった。賢は亜希子の目を見つめた。ふたりは黙って、暫く見つめ合っていた。一人の小学生が近付いて来た。

「小父さん。釣りしてるの？何か釣れる？」

「いやだめだね」

その時、釣り竿の先が大きく引っ張られた。賢は必死に竿を上げた。おもりにテングサの大きな房が絡み付いていた。子供が笑った。

「はっはっはっ。小父さん。大きいのが釣れたな」

「おい坊主、お前、海の老人知ってないか？」

「知ってるよ」

「えっ！今どこにいるんだ？会えないかな？」

「小父さん、それは無理だよ。海の老人は疾風のように現れて、疾風のように去ってゆく、まるで月光仮面なんだ」

「お前、よくそんな古いこと知ってるな」

「どこの誰だか知らないけれど、ここで釣りしてる人なら、誰でもみんな知ってるよ。小父さん、月光仮面って強い正義の味方なんだぜ。皆が困った時に、どこからともなく現れて、どこへともなく消えてゆくんだ。海の老人も、ここだけじゃなくていろいろなところに現れるんだ。宍道湖で会った人の方が多いよ」

「いや、おじさんは月光仮面は知らないな。そんな古い話」

「なんだ、つまんない」

「だけど、宍道湖って湖だろ。どうして海の老人って言われるのかな？」

「宍道湖は縄文時代より前は海の一部だったんだよ。水もしょっぱいんだぜ。だけど蜆が取れるから、今じゃ海じゃないけどな。ちょっと変わってるんだ」

「おまえ、縄文時代なんてよく知っているな」

「先生が言ってたんだ」

「そうか。よく覚えているじゃないか、大したもんだ。ところで、おまえ、釣りしないのか？」

「したいけど、父ちゃんが釣竿買ってくれないんだ。中学になったら買ってやるって言って」

「そうか、じゃ、この竿やるよ。月光仮面のこと教えてくれたお礼だ。だけど父ちゃんに叱られないか？」

「やったー！父ちゃんを説得するから大丈夫。俺の父ちゃんは意外と優しいんだぜ。本当は俺が釣りをすると危ないって思ってるんだ」

賢は糸を元のようにリールに巻き付けて竿を畳み、男の子に渡した。

「小父さん、ありがとう」

子供は喜び勇んで駆けて行った。

「亜希子さん、そろそろ戻ろうか？もう3時を回ったから、海の老人にはそのうち会えるような気がするよ」

「はい・・・賢さん、さっきずっと海を見つめていたでしょ。あの時、あなたの姿が、ずっと遠くに離れてゆくような感覚、いいえ、本当に小さく見えて来たんです。あなたがこちらを向いてから、まただんだん普通の大きさに戻って来ました」

「そうだったのか。俺は、海に溶け込むような感覚になっていたよ。君が俺の方を見ていたんで、君の目を見たんだ。美しい目だったよ。俺は君の瞳の力で現実に戻って来たような感じだ」

賢はそれ以上は説明しなかった。先ず自分が立ち上がり、亜希子の手を取って立ち上がらせた。亜希子は賢の敷いてくれたハンカチを取り上げ、きちんと畳んで賢に返した。賢は無造作にそれをズボンのポケットに突っ込んだ。賢はミネラルウォーターを1本亜希子に渡し、自分もキャップを開けて飲んだ。亜希子も少し飲んだ。ふたりは元来た道に戻った。濱屋の店主はにこにこしながら言った。

「どうだったかね？爺さんのこと分かったかね」

「子供から教えてもらいました。海の老人には会えませんでした、でもよく分かりました。ありがとうございます」

ふたりは店主に頼んで、タクシーを呼んでもらった。

「お客さん、釣り竿どうしたんですか？」

「ああ、さっき会った子供にあげたんです」

「そいつはきっと、良介だがね。母ちゃんが早くに亡くなったけん、親父さんが育てているんだが。親父さんは一寸頑固者で、良介に釣りをさせないんだ」

「あの子、親父さんに叱られないかな？」

「そりゃ大丈夫だがね。あの良介は頭がいいから、うまく話すだろうけんね」

「それはよかった」

まもなくタクシーが来た。ふたりは預けてあったスーツケースにミネラルウォーターを押し込んで、トランクを開けて乗せてもらってからタクシーに乗り込んだ。

「花の屋さんだね。お客さん、新婚旅行かね？」

「いいえ。調査旅行です」

「なんの調査だね」

「あの、去年のバスの転落事故のことで」

「ああそうなんだ。あの時はずいぶん繁盛したんですよ。やれ警察だ、

やれテレビ局だ、やれ新聞社だって」

タクシーの運転手はそこで質問を止めた。納得したようであった。宿に着いたのは4時半を過ぎた頃だった。ふたりがホテルのエントランスから中に入ると、接待係がふたりを出迎えてくれた。玄関から直ぐに板張りの広間になっていて、その奥にチェックインカウンターがあった。床がよく磨かれていて、装飾品も安っぽくなく、なかなか趣のあるホテルだ。

「履き物はそのままにしておいてください。わたくしどもがしまいますけん。受付はこちらでございます。奥様はこちらのスリッパをお使いください」

接待係は、ふたりに違う色のスリッパを出した。賢には緑色、亜希子にはオレンジ色のスリッパだった。ふたりは受付で別々にチェックインした。食事はホテル内のレストランに用意されるとのことであった。賢は一つのテーブルにふたりの食事を用意するように頼んだ。賢は215号室、亜希子は216号室だった。

「よかったわ。隣同士ですね」

「うん、俺もほっとしたよ。亜希子さんが隣の部屋なら一応安心だから」

ふたりは案内係の申し出を断って部屋に向かった。

「お食事は6時ですね」

「そうだね、先に風呂を浴びちゃうおうか？今日は一寸疲れたからな」

「そうですね。では、お食事の時に下でお会いしましょう」

ふたりは部屋の前で別れた。賢が部屋に入ると、1週間前祐子と一緒に泊まった河合楼の部屋とほとんど同じ造りだった。祐子は賢に寄り添っていた。部屋に入ったときの祐子の喜んでる姿が眼に浮かんできた。ただ、部屋に設置されている浴室はほんの気休め程度の簡単な造りで、「一応は設置してありますが、どうぞ大風呂の方にお入りください」とでも言わんばかりのものだった。賢はスーツケースを放り出すと、すぐに浴衣に着替え、下着とタオルを手に大風呂に向かった。大風呂の浴室は間接照明で薄暗く、壁面に磐を貼り付けた岩風呂の形を作っている。

その岩肌から湯が掛け流しになっていて、浴槽に流れ込む時に僅かな渦を作りながらサーツという音を立てている。浴槽は3つあって、一つは全面ガラスの窓を隔てて造られた中庭の中に設けられていた。賢は身体を流し、洗い場に面した一番大きな湯船に浸かった。まだ誰も入っていなかった。ほっとする湯船の中で今日一日のことを逆に辿ってみた。祐子と一緒に天城湯ヶ島の温泉に宿泊した時は喜びを伴った大きな心の動きがあったが、この日は日御碕海岸で海を見つめていた時の海に溶け込んでゆく意識の変化、そこで遇った小学生との会話、そして出雲空港で亜希子と出会った時の驚きとが強く浮かび上がって来て展開された。賢は湯から上がるとすぐに部屋に戻った。今日一日の調査の内容をまとめようと考えてスーツケースからノートとボールペンを取り出し、明日着る衣類を用意した。朝からの心の動きと状況の推移を克明に記入していった。ペンを置き窓の外に目をやると、ホテルの前を流れる川の水面に付近の宿の灯りがゆらゆら揺れて、夏の暑さに一服の涼しさを添えていた。時計を見ると5時20分を指していた。その時ドアを叩く音がした。亜希子が浴衣姿で立っていた。石鹸の匂いが湯上がりの女の香りを感じさせる。艶めかしさより清楚な美しさを賢は感じた。

「内観さん、お風呂いただきました？」

「うん、さっき入ったよ。いま、今日一日の内容をまとめていたところさ。どうぞ、中に入って」

亜希子は少し躊躇したが、

「それでは、失礼致します」

と言って中に入り、ドアを閉めた。しかし、入り口に立ったままスリッパを脱ぐ様子は見せない。賢は立ったまま話し掛けた。

「亜希子さん、今日、特に強く感じたことを教えてもらえるかな」

「はい。先ず、内観さんがわたくしの同伴を許してくださったこと。それからあの海の老人が神出鬼没な現れ方をすると聞いたこと。海で内観さんが遠くに行ってしまうように感じ、じっと見つめていたらまた戻って来るように感じたこと。それと、一番感動したのはあなたの優しさです」

「俺は、自分の感じる通りに行動しているだけだよ。君にも特に優しくしている訳じゃない」

「でも、十分優しいです。内観さん、今日着替えた衣類とハンカチをください。わたくしが洗濯して、明日の朝お返します。夏なので一晩で乾くと思います」

「いいよ、自分で洗うから」

「いえ、それもわたくしの役目です」

「そうか、分かった。それじゃ頼むよ」

賢はさっき着替えたビジネスシャツとハンカチを亜希子に渡した。亜希子は下着も洗うと言って聞かなかった。賢は仕方なく、アンダーウェアを丸めて渡した。

「それでは、わたくしは今洗濯してしまいます」

亜希子がそう言って立ち去ろうとした時、部屋の電話が鳴った。賢は

「ちょっと待って」

と言いながら部屋に入り受話器をとった。

「もしもし、はい内観ですが。はい分かりました。繋いでください」

祐子からの電話だった。亜希子は賢から受け取った衣類を左手で抱えて立っていた。賢は亜希子に向かって左手を振った。亜希子は部屋から出て行った。

「賢くん、今日はどうだった？暑かったでしょ」

「うん、暑かった。でも1日目にしては上出来だ。海の老人のこと結構いろいろ分かってきたよ」

「でも、一人じゃ大変だったでしょ。私と一緒にならよかったのに」

「うんそうだな。だけど、空港で亜希子さんに遇ったんだ。この調査を手伝ってくれるって言って附いて来たんだ。調査も協力してくれて助かっているよ」

祐子は頭がカーッと熱くなるのを覚えた。そして、胸の鼓動が激しくなってきた。

「何故亜希子さんが行ったの？・・・賢くん、亜希子さんとあまり親しくしないでね。わたし・・・」

祐子の声が涙声になっていった。

「祐子、どうしたんだ。もう一昨日おとといの夜のことを忘れたのか？」

賢は賢の言葉でなんとか興奮を抑えることができた。

「・・・うん。でも、びっくりしちゃって。あなた、あんまり親しくしないでね」

「わかっているよ。心配するな。明日また電話するから」

賢は電話を切った。時計は6時を回っていた。賢は部屋を出て夕食のレストランに向かった。仲居が部屋番号を確認して入り口のすぐ左手のテーブルを指差した。そこには既に亜希子の姿があった。

「亜希子さん、遅くなってごめん。それに洗濯までさせちゃって」

「いいえ、わたくしも今来たばかりです」

賢は亜希子が先ほどの電話の事を何も聞かないのでほっとした。仲居が来た。

「お飲み物はどうされますか？」

「亜希子さん、ビールでももらおうか？」

「はい」

「ビールを1本お願いします」

「かしこまりました」

仲居はすぐにビールとグラスを2つ持って来た。亜希子がビールを手にして、

「内観さん、どうぞ」

と言って賢のグラスに8分目ほど注いだ。注ぎ終わってすぐ賢がピンを亜希子から受け取った。亜希子は

「わたくしはあまり強くないんです」

と言いながらも、賢の注ぐビールを右手に持ったコップを少し前に差し出して受けた。伏目がちに恥じらいを見せる亜希子の姿に、賢はあどけなさに似た印象を受けた。ふたりはグラスを合わせた。

「今日のご苦労さん」

「お疲れ様でした」

仲居がつぎつぎに料理を運んで来た。賢は亜希子の顔を見た。少し上気

して頬が薄紅色に染まっている。

「わたくし、家族以外の男の人と一緒にふたりで夕食をするの初めてなんです。だから恥ずかしくて」

「そうか。道理で伏目がちだと思った。ここじゃ、知っている人は誰もいないから心配ないよ」

「いいえ、あなたが前にいるので恥ずかしいんです。それに浴衣ですし」
賢は確かにそうだと思った。普通ではありえないことだと思った。賢は話を調査のことに移した。

「明日、もう一日ここを調べてみようと思うんだ。あの海の老人と江川さんの関係が今ひとつはっきり解らないし、そのことと江川さんが消えたこととが関係ありそうかどうか調べてみたいんだ」

亜希子は恥ずかしさを忘れたように答えた。

「はい。どちらを調べるのですか？」

「あの日御碕海岸で会った少年の言ったことをもう少し吟味してみようと思うんだ。宍道湖の周りでいろいろ聞いてみようと思っているんだ」

「分かりました。よろしければわたくしも聞いて廻ります」

「そうしてもらってありがたい。俺と別行動になるかもしれないよ。君一人で大丈夫かな」

「わたくしは大丈夫です。アルバイトをしていた時、いろいろな人に接していろいろな経験をして来ましたから、人と接することは大丈夫だと思います」

「亜希子さんって、意外としっかりしているんだな」

「いいえ、わたくしはそんなにしっかりしていません。あなたを探していたときはびくびくしていましたが、ただ、心に決めたことは絶対に守ろうと意地を張って来たのです。絶対あなたに逢えると信じていましたから、アルバイトの仕事が辛い時でも辛抱できました。いま、目の前にあなたがいらっしやるので、とっっても安心して、何でも大丈夫と思えるのです」

亜希子は少し饒舌になっていた。そんな自分が嬉しくも思えた。

「そうか、それを聞いて安心だ。じゃ明日は朝、宍道湖に移動しよう。」

それからお互い、別々に海の老人と江川さんのことを調べて、4時ころ県立美術館のエントランスで落ち合おう。調査を終えたら夕日を見よう。あその夕日の美しさは各別らしい。小泉八雲がその夕日に魅せられて住み着いてしまったほどだからな」

「嬉しいわ。とても楽しみだわ」

ふたりは食事を済ませて部屋に戻った。既に床が敷いてあった。賢は快い疲れが襲ってきてすぐに眠りに落ちた。亜希子は自分の部屋に戻ると、先ほど洗濯した賢の衣類と自分の下着を確かめた。特に賢のシャツの汚れが落ちているかどうか念入りに確認した。シャツはまだ全く乾いてきた形跡がなかったが、汚れは跡形もなく消えていた。洗濯物を掛けるため洗面所のタオルはすべて取り去って畳み、部屋の隅に置いた。賢の下着と自分の下着を同じポールに掛けながら、胸が早く打つのを覚えて恥ずかしくなった。賢のビジネスシャツは汚れた部分だけに石鹸を含ませ、軽く叩いて洗い水で洗い流した。それをクローゼットにあるハンガーに掛け、バスルームのシャワーのノズルを受ける金具に掛けた。

亜希子は、翌朝は少し早めに起きた。まず洗面所に行って、洗濯物の乾き具合を確かめた。すべて乾いていたのでほっとした。初めに賢のシャツと下着を畳み、ハンカチを四隅が合うようにきちんと畳んだ。それを重ねて、部屋のテーブルの上をティッシュペーパーで拭いてからそこに置いた。その後で自分の下着を畳み、スーツケースの中に収めた。外しておいたタオルはすべて元通りに戻した。亜希子は身繕いを整えた。淡い黄緑色のワンピースにグレーのレディースベルトを締め、首に金のネックレスを着けた。身支度を整えると亜希子は朝食のレストランに下りた。昨晚と同じテーブルに朝食が用意されていた。まだ賢の姿は無かった。7時までにはあと7分ほどあった。亜希子は周りを見回した。夫婦と思われるカップルが5組ほどテーブルを挟んで向かい合っていた。どのカップルも互いに慣れ親しんでいる様子だった。亜希子は自分たちはどんな風に見えるのかなと思った。そのほかに家族連れが4組ほど食事をしていた。すぐに賢が来た。

「おはよう、よく休まった？」

「おはようございます。ぐっすり眠ることができました」

仲居がやってきて食事の支度を整えてくれた。亜希子は恥ずかしそうに伏目がちになった。

「いただきます」と言ってふたりは同時に箸を手にした。賢は恥ずかしそうに視線をテーブルに落としたまま食事をする亜希子の姿が、可愛らしいと思った。亜希子の黄緑色のワンピース姿がことに爽やかさを感じさせた。食事を終えて部屋に戻ると賢は荷物をまとめ始めた。先ほど朝食を摂りながら、亜希子が洗濯したものを持って来ると言っていたのを思い出した。ドアのノックの音は亜希子だと直ぐわかった。亜希子はきちんと畳んだ賢の衣類とハンカチを右手の上に載せてドアの外に立っていた。賢はそれを受け取りながら亜希子がしっかりした家庭に育った女性だと悟った。

「ありがとう。すっかり手間を掛けちゃったね」

「汚れはすっかり落ちました。シャツはアイロンを掛けられないので、汚れたところだけ洗いました」

亜希子は賢が喜んでいるのを見て胸躍った。ふたりが宿を出たのはそれから30分ほど経ってからだった。賢は小さなブラウンのセカンドバッグを手に持ち、亜希子は昨日と同じハンドバッグを手にしていた。ふたりとも昨日賢が買った麦わら帽子を被っていた。

「亜希子さん。俺はスマホを持っていないから、あっ、そうだ、君はスマホ持っていたな？」

「はい、出掛けてくる前に機種変更しました」

「そうか、それは良かった。もし、何かあったらすぐに警察に電話するんだよ、いいね・・・いや、ちょっと待って、やっぱり一緒に行こう。昨日のように、君が見えないと心配だ」

「わたしなら、大丈夫です」

「いや、やはり一緒に行こう」

「はい」

亜希子はうれしかった。自分を気遣う賢の気持ちに喜びの感情が湧き上がるのを覚えた。ふたりはタクシーで宍道湖の湖畔にある土産物店に行

った。そこから順に海の老人のことを聞いて歩いた。互いにできるだけ別の人に質問するようにしながら歩いた。土産物店ではほとんど海の老人の情報は得られなかった。亜希子の頭に「昨日の少年の話が本当だろうか」という疑念が沸いてきた。

「内観さん、あの少年の言ったことは本当でしょうか？」

「亜希子さん、俺はあの少年と話をしただろう。それが嘘か真実かはどうでもいいんだ。自分もそう思ったから今日、こうして行動しているんだよ」

「ごめんなさい。わたくしはすぐに判断しようとしてしまって」

「いいんだよ。君は自分の信じる通りに行動すれば」

賢は是非を言わなかった。すでに13軒の店を廻っていたが、みな否定的だった。ふたりは場所を移動することにした。タクシーを拾い、運転手に尋ねた。

「運転手さん、この辺りで釣り人の集まるところをご存知ですか？」

「宍道湖の河畔にはあまりないな。斐川の町に入れば、釣って来た魚を捌いてその場で料理してくれる店があるんだけど。少し離れるがね」

「そこに行って頂けますか？」

「わかりました。だけどそこは12時からしかやってないよ。今は仕込みの最中さ」

「はい、それで結構です」

15分ほど走ると、人家の散在する道路脇に1軒の小料理屋が見えた。タクシーはその駐車場に入り、ふたりはそこで降りた。時間は11時半を少し回ったところだった。小料理屋はまだ暖簾を出していない。引き戸を引いて中に入るとカウンターがあり、そのマスターがふたりの姿が見えるや否や言った。

「お客さん、すみません、まだなんですが」

「はい、分かっています。ちょっとお伺いしたいことがありまして」

「何かね」

「こちらに海の老人が来ますでしょうか？」

「ああ、親父さんのことか、ここには来ないけん」

マスターは仕込みの手を休めずに答えた。その返事を聞いて、ふたりは飛び上がるほど嬉しかった。やっと海の老人の足跡を掴めそうな気がした。

「どちらに行けば会えるのでしょうか？」

「そりゃ、わからんがね。なんたって親父さん不思議な人だけんね。こっちが会いたいと思っても、連絡のしようがないけん。みんなが集まってる時とか、困ってどうすることもできない時とか、そんな時に知らない内に居るんだが。で、親父さんが消えた後、周りにいた衆が嬉しくて堪らなくなってるんだが。不思議な親父さんだけん。ところでおふたりさん、親父さんになんか用でもあるんか？」

「はい、実は去年の秋に起きたバスの転覆事件のことを調査しているんです」

「警察の方で？」

「いえ、私たちは警察とか報道関係とかではありません。あの事件の時に消滅した人がいたことをご存知と思いますが、そのことを調べているんです」

「へえ、そげだかね。それじゃ、あの江川の知り合いか何かかね」

「いえ、自分たちも一時的に消えたことがあるんです。自分たちのことがよく解らないんで、この事件の成り行きが解れば少しは消滅の原因が判るかと思ひまして」

「へー、そうだったんかね。実はあの江川は家の親戚に当たるんですがね。あっしの甥っ子ですが、あいつがいなくなって、親父さんやお袋さんが悲しんでな。あいつは無口で大人しい奴だったけど、水泳が得意で高校選手権で準優勝したこともあるんですがね。特に親父さんは息子に入れ込んでたけん。だけど、急にスランプになっちゃって、暫く何もしないでいたんだが、急に思い立ったように紅葉の大山を見たいなんて言って、あのツアーに参加したんだがね。そしたら、いなくなっちゃって。あの前の日、あいつから電話があったんで、かみさんがあいつに会いに行ったんだが。かみさんがみやげにと、ここの蜆の佃煮を持って旅館のロビーに行った時、あいつは旅館のロビーで老人と話してたって言うん

だが、かみさんの話の内容からすると、そのときの老人ってのがどうもわしゃお客さんの探している親父さんじゃないかって思っとる。その海の老人だがね」

「へえ、そうなんですか？それじゃ、やっぱり江川さんは海の老人に会っていたんだ」

「お宅、どうして、そげんことを知っていなさるかね」

「昨日出雲大社の前の土産物店で、店員の方が「江川さんが老翁に手を引かれて歩いていた」って言ってたもので」

「そうでしたか。かみさんの話では、江川はその老人の話を頷きながら聞いていたってことなんですがね。だけど、姉さんーかみさんの姉妹なんだけど、それに聞いていたより表情がずっと明るくなっていて、安心したって言ってたんですがね。その矢先の消滅なんで、皆「どうしたもんか」って、まるで神隠しに遭ったようなんですがね」

「そうですね。最近江川さん以外に6人も消えているんです」

「うん。わしも知ってますがね。なんか、よくわかんない事件で」

ふたりはその店で食事をした。

「海の老人はどの辺りに行けば会う機会があるんでしょうね」

「店によく来る釣り人の話じゃ、宍道湖の北側でよく出会うってことですがね。だけど、あそこあたりは釣り人以外はあまり行かない場所だし、ここ暫くはみんな遭ってないようだから、行っても無駄だと思うがね」

「そうだったんですか。今朝宍道湖の西側を聞いて歩いたんですが、海の老人のことを知っている人は全くいませんでした」

「そりゃそうだが。親父さん、あの辺りにいたなんて話は聞いたことないけん」

ふたりは食事を済ますと、思い掛けない進展に喜びの感情が湧いてきて、同時に何となく海の老人に会えそうな予感がしてきた。賢は礼を言ってタクシーを呼んでもらい、海の老人らしき人がよく現れると聞いた宍道湖の北側の淵に行ってみた。そこは小料理屋のマスターが言うように立ち家も疎らで、昔の川の州が土砂で埋まり、川がなくなって小さな集落を作っていると思われる地域が転々と並んでいた。宍道湖の北の岸はそ

れほど高さは無いが、あまり変化の無い切り立った岩場である。賢は黙って亜希子の手を取った。亜希子は手を握られたとき一瞬ドキッとしたが、賢の為すままになっていた。亜希子の手は柔らかくやや冷たかった。賢は亜希子の手を引いたまま湖の縁まで来た。海岸は柵もなく危険な感じだった。その淵に昨日の少年が釣り糸を垂れていた。賢は少年に近付いて話し掛けた。

「やあ、親父さんうまく説得できたみたいだな」

「あつ、小父さん。やったぜ！」

少年は左手でV字サインをして見せた。

「父ちゃん、夕方5時までならいいって。だけど釣りをした時間だけ、夜勉強をする約束をさせられちゃった。釣り竿も、もらっちゃったんだから精がないって言って許してくれたよ。小父さん、ありがとう」

少年は白い野球帽を少し右に回した。本人は格好を付けたつもりらしかった。亜希子が少年に話し掛けた。

「坊や、何か釣れるの？」

「いいや、今んとこ何も来ないね」

少年の横には水の入ったビニール袋が置いてあったが、何も入っていないかった。

「そうだ、小父さん。昨日日御碕に月光仮面が来たよ。今日ここに来れば釣れるって言ってそのまま何処かに行ってしまったんだ。だから俺、ここで釣っているんだぜ」

「えっ。海の老人に会ったのか？」

「ああ。でも直ぐいなくなっちゃったよ」

賢と亜希子の顔がパッと明るくなった。程なく少年の竿に魚が掛った。

「チュウハンだ」

そう叫んで少年は魚を針から外すとビニール袋に入れた。セイゴだった。

「この辺りじゃよく釣れるのか？」

「ああ、夕方がいいんだけど、父ちゃんがだめだって言うからな」

またウキが引いた。続けざまに5匹の魚を少年は釣り上げた。入れ食いだった。急に少年が釣り竿を納め始めた。

「どうした、今釣れてるところなのに」

賢が言うと、少年は胸を張って

「今日はこれまでにするんだ。5匹も釣れたから、魚が一杯来てるんだな。さすが月光仮面の言う通りだ。小父さん、ふつうこの時間にはあまり釣れないんだぜ」

少年は片付けた釣り道具を丁寧に布切れの袋に入れた。どうやら、自分で作った紐を縫い付けた袋のようで、青い布地に白色で蛇行した縫い目が未熟な裁縫の形跡を残している。少年は釣り竿を肩に掛け、ビニール袋を手を持つと頭をぴよこっと下げて帰って行った。その動作があまりに素早かったので、賢と亜希子があっけにとられて少年を見送っていた。

「この湖は塩水湖なのかしら」

「汽水湖って言って、淡水と塩水が混じっているんだって。いろいろな魚が漁れるようだよ。夏の炎天下だっていうのに釣り好きはいるもんだな。ほらあのボートも釣り舟だろう」

そう言って賢は100メートルほど沖に漂っている1艘のボートを指さした。麦わら帽子を被り黄色いシャツを着て赤いズボンをはいた男が一人ボートに乗っていた。しかし、よく見ると釣り糸を下ろしている様子はなかった。賢は意識が自然にその男に集中してゆくの抵抗せずに受け止めていた。亜希子はそれが老人であることを見て取った。じっとその老人を見つめていると次第にイメージが拡大してゆくのを感じた。実際、ボートは近づいて来ていた。やがてボートはふたりのいる直ぐ近くまでやって来た。やはり老人であった。老人はふたりに向かって口を開いた。

「わしのことを探しているようだな」

賢ははっとした。あの鷹狩りで見た老人だった。賢はじっと老人を見つめて応えた。

「あなたが、海の老人と言われている方ですか？」

「海に近い人たちはそう呼んでいる」

「私は、内観賢と申します」

「わたくしは、藤代亜希子と申します」

「ああ、分かっている」

「えっ！」

賢と亜希子は驚いたが、何故知っているのか敢えて理由を聞こうとはしなかった。

「どうして、わしを探していたんだね」

「はい、私たちは最近起きている失踪事件の原因を調べているんです。昨年の晩秋に起きた大山のバス転落事故で江川勝児さんという方が消滅したんです。その消滅の前日、江川さんがあなたに会っているという話を聞いたものですから、是非お会いしてお話を伺いたいと思ひまして」

「そのことか。わしは江川勝児に教えることがあって少し話をしたのだよ」

「どんな、話をされたのですか？」

「生き方とでもいうか・・・今、君たちに話しても分からないだろう」

「それだけなのですか？」

「そうだよ。勝児は嫌がってたけどな」

「どうしてでしょうか？」

「それはまだ時期が来ていないからだ。いま君たちに話せることはこれだけだ。しかしこれからのために大事なことを教えておこう・・・君たちはいつも異なった次元に入っているんだけど、ほとんどの人はそのことに気付いていないんだ。それは五感からしか世界を観ていないからだ。見ているのは光だけだ。光には実在的部分と虚存在的部分があって、その複合で成り立っている。この虚の部分が現在の科学では見落とされている。だから、最後のどん詰まりで分からなくなるんだ・・・今言ったことをよく覚えておきなさい」

海の老人の言葉には近寄ることのできないような威厳を感じ、思考を押し挟む余地など全く無かった。

「はい」

賢と亜希子は同時に、反射的に返事をした。海の老人はボートを一漕ぎした。ボートはその一漕ぎで見える見るうちに先ほど漂っていた位置まで遠ざかった。不思議な動きだった。賢と亜希子は胸の鼓動が激しくなっ

て身体が熱くなっているのを感じた。亜希子が賢の方を振り向いて

「内観さん、今の言葉覚えていますか？」

と言った。

「うん、まだ記憶に残っている。忘れないようにノートに書き取るよ」
賢は海の老人と話をしている間も、ずっと亜希子の手を握っていた。ようやく亜希子の手を離すと、汗ばんだ手でセカンドバッグからノートとペンを取り出して海の老人の言葉を書き取った。亜希子は賢が途切れることなくすらすら書いている姿を見て、「なんと記憶力がよい人なのでしょう」と思った。賢が書き終えて目を湖に移すと、既にボートは見えなくなっていた。ふたりは佇んで暫く海を見つめていた。賢は意識が広がるのを感じた。昨日の感覚に似ていた。自分が湖の一部になってゆくような気がした。しかし、祐子の光は浮かんでこなかった。その感覚はとても暖かく、心地よいものだった。亜希子は湖の対岸の緑と雲一つ無い空を見つめていた。空が自分の中に広がるのを感じてきた。心が静かになってゆくのを感じてうっとりとした。しかし不思議に意識だけははっきりしていた。ふたりは暫く湖に向かって佇んでいたが、やがて賢が口をきいた。

「そろそろ県立美術館に行こうか？」

時計は3時を回っていた。

「はい。わたくし、今、心が満たされている感じがします。すこし一緒に歩いて頂けますか？」

「うん。俺も意識が冴えていて少し歩きたい気分だ。君の手を引くけどいいかい？」

「はい」

賢は亜希子の安全を考えて言ったが、亜希子は賢の優しさと受け取った。ふたりは車道の脇にある歩道を、県立美術館に向かった。単調な景色が続いた。亜希子はただ賢に手を引かれて歩いているだけで喜びに満たされた。およそ30分ほど歩いたとき亜希子のスマホが鳴った。ふたりは立ち止まり、賢は亜希子の手を離した。亜希子はハンドバッグからスマホを取り出し応答した。

「もしもし、ああ、お母さん。いま、島根の宍道湖の畔にいるのよ。友達と一緒に。はい・・・はい・・・分かったわ。明日の朝の便で戻るわ」

「何か急用？」

「はい、華道の先生がお倒れになったの」

「それは大変だ」

「ごめんなさい。充分お手伝いもできない内に戻らなければならなくなってしまうって」

「そんなこと気にしないで。君のおかげで随分助かったよ。で、直ぐに戻らなくてもいいのか？」

「そんなに危急な状況ではないようです。母が明日の朝のフライトを予約してくれましたわ。先生にはずっと個人的にご指導して頂いていて、両親も懇意にしておりますので」

「いま、ふたりで先生の回復を祈ろう」

「はい」

ふたりはその場で1分ほど瞑想し、華道の先生の回復を祈った。少し歩くと1台のタクシーが通り掛った。ふたりはタクシーに乗り県立美術館で降りた。美術館は湖に突き出た形で建っていた。中に入ると、館内はガランとしていた。子供連れの親子のグループがちらほら見学している程度だった。水を題材にした絵画が多く展示されていた。賢は亜希子の後に従うように見学した。時々亜希子が賢の方を振り返り絵画の感想を言っていた。賢はその度に頷いて見せた。館内を一周廻ると6時近くになっていた。ロビーの西側には夕日を鑑賞するために全面ガラス張りにした窓が設けられている。ふたりは椅子が二つだけ置かれている丸テーブルに席を占めた。そこからは宍道湖が一望できた。

「ここは全国的に有名なところらしいな」

「はい。わたくしは以前、両親と一緒に来たことがあります」

「それなら夕日の素晴らしさは知っているな」

「いいえ、その時は曇り空だったので、美術館を鑑賞しただけでした」

「それは残念だったな。今日は快晴だから夕日を楽しめるな」

「はい」

亜希子は「あなたと一緒に見ることができて幸せです」と心で言って、賢に向かって会釈を返した。陽は次第に西の空に落ちて行った。辺りはオレンジ色に染まり、日の光と空のオレンジ色を映して大気全体が金色に染まったようになっていった。ふたりは無言で夕日に瞑想した。賢は半眼になり、黄金色に変わってゆく空と一体になろうとした。しかし、窓ガラスに光の影が映り、意識がその変化に動かされるのを感じて至福の感覚には至れなかった。あまりに用意され過ぎていた。亜希子も賢の姿を見て瞑想に入ろうとした。しかし、夕日の黄金色があまりに美しいと思い、賢が自分の目の前にいることに意識が流れて夕日に集中することはできなかつた。それでも、ここから望む夕日はこの世のものとは思えないほど美しかった。美術館は、この時期は夕日が沈むまで閉館時間を延ばすという粋な計らいをしていた。ふたりは暫くの間そこで夕日を見つめていた。家族連れの子供達が賑やかに話していた。賢はその声にどこか懐かしさを覚えた。騒がしさと夕日の静粛が釣り合っているように感じた。夕日が落ちると、湖の色は金色から紫色を経てやがて灰色に変わっていった。ふたりは美術館を後にした。タクシーで花の湯に着いたのは7時少し前であった。ふたりは部屋に戻ると、そのままレストランに向かった。夕食は洋食であった。賢は亜希子に訪ねてから白のグラスワインを2つ頼んだ。

「今日はいろいろ進展があったな」

「はい。あそこで海の老人に会えるとは思ってもみませんでした」

「海の老人が我々をあそこに呼んだんだと思う」

「そう言えばそうですね。あの方はすべてを見通しておられるように思いますもの」

「うん、不思議な人だ」

「ところで、あの方が仰ったことはどういうことですか？」

「話している言葉の意味は分かったけど、それが実際の世界でどうなっているのか分からない」

「わたくしは言葉の意味もよく分かりませんでした。教えてくださいませんか？」

「つまり、俺たちはみんな、五感に頼って生きているけど、五感で感じられる世界がすべてじゃないってことを言っていたんだ。特に目に見える世界は、目が光を感じてそれを脳が解釈して判断しているだろう」

「はい、でもこれまでそんな風に考えたことはありませんでした」

「目に見えるもの以外に別のものもあるって、あの海の老人は言っていたのさ。『もっと認識力を高めろ』ってことだと思うよ」

「そう言えば、確かにわたくしも目に見えないものへの感覚が働いているって感じる時があるわ。自分が消えたような特殊な状態の時も、目に見えないものを見ているような妙な感覚があったわ」

「君もそうか。俺も、ある特殊な状況で目に見えないものを見ているって感覚を意識することがあるよ。それに、ある人が輝いて見えたり、輪郭がぼやけて見えたりすることもあるんだ。他の人にはそんな風に見えないようだけど」

「内観さん、これからの予定をお聞きしてもよろしいですか？」

「勿論だ。君のおかげで、まず、今回の調査の目的の半分が達成できた。明日は少しこの近くを見学して、それからレンタカーを借りて観光バスの通った大根村を訪れ、そこの由志園という日本庭園を見学してから時間があったら仮想現実のVEAS館に寄り、足立美術館の近くの鷺ノ湯温泉に1泊する予定だ。その次の日は大山に入るつもりだ。大山では途中、地元の人たちにいろいろ聞いてみようと考えている。その後で転落事故現場を見て、暫くそこに留まってよく地形を調べようと思う。だから大山山の上ホテルには2泊して、まだ疑問点が残るようなら、怪我人が運ばれた病院と警察の派出所を訪問してみるつもりだ。その日は鳥取に戻って鳥取砂丘から天橋立に行き、籠神社をお参りして翌日鳥取空港から羽田に帰る予定だ」

「ご一緒したかったですわ。でも、二日間ご一緒させて頂けたから、それだけでも感謝しなくてはいけないわ」

「俺も、君と一緒にだと楽しいけどな。一寸残念だ」

「一寸だけですか？」

「いや、とても残念だ」

亜希子はすこし酔いが廻って、頬がほんのり赤くなっている。ふたりが食事を終えたのは8時10分頃だった。ふたりは風呂に入って休むことにした。賢は直ぐに風呂に出掛けた。疲れがどっと出てきたように感じた。炎天下を随分歩いたからだと思った。ふと、亜希子のことが気掛かりになった。またいつものように湯船に浸かりながら一日の省察を行った。今日は大きな収穫があったと思った。湯船の中での省察は、心地よい疲れが眠気を誘い危うく眠りに落ちそうになった。癒された気分風呂から上がると賢は浴衣に着替えて部屋に戻った。部屋で下着を洗いタオル掛けに干していたときドアをノックする音がした。鍵を開けると仲居が二人立っていた。

「お客さん、お連れのお客さんが浴室でお倒れになったんです。幸い貧血のようでしたから、すぐ係のものが浴衣をお着せしてお部屋にお連れしました。今、床に着かれていらっしゃいますが、取りあえずお知らせした方がよいと思ひまして」

「ありがとうございます。で、亜希子さんは大丈夫なのでしょうか？」

「はい、直ぐにお気づきになりました。お部屋まで係が肩をお貸しましたが、ご自分で歩いて来られましたので大丈夫と思ひます」

「わかりました。お手数をお掛け致しました」

そう告げると仲居は戻って行った。賢は直ぐに亜希子の部屋に行きドアをノックした。少し間をおいて、亜希子が浴衣姿で現れた。

「亜希子さん、大丈夫ですか？」

「あっ、内観さん、ごめんなさい。わたくし貧血を起こしてしまったみたいで・・・どうぞ中にお入りください」

賢は亜希子の後を部屋に入った。

「具合はどうですか？」

「はい、今は意識がはっきりしましたが、倒れた時にお風呂の座椅子で背中を打ってしまったようで、背中が少し苦しいです」

賢は亜希子を座らせてそっと背中を摩った。亜希子は左の背を摩られたとき苦しそうな顔付きをした。しかし、身悶えるような苦しみ方ではなかった。賢は打ち身だろうと思った。亜希子は打ち身の湿布を持ってい

なかった。賢は直ぐに自分の部屋に行き、スーツケースから打撲用の鎮痛軟膏を取り出し、それを持って亜希子の部屋に戻った。亜希子は依然として畳の上に座り、静かに肩を前後させていた。賢は亜希子の背後に回り込むと、

「恥ずかしいかもしれないけど、少し浴衣を上に入れて、我慢して」と言っ、亜希子が帯をゆるめるのを待って、左手で亜希子の浴衣を肩からずらして襟を後ろに広げ、軟膏をチューブから押し出して右手の3本の指に広げ、中の3本の指が襟に触れないように注意しながら押し広げた襟元から亜希子の背中に右手を入れた。掌に触れる亜希子の肌はなめらかで少し冷たく感じられた。亜希子は恥ずかしさに両手で顔を覆った。賢が3本の指をそっと肌に触れるようにして薬を塗ってゆくと、指先が肩胛骨の少し下側に触れたとき、亜希子は「うっ」とうめき声を出した。痛みが走ったようだった。賢は、亜希子が痛みを現したところを中心に周りを撫でるように薬を塗りながら、

「どうだ、塗っているとき痛みはあるか？」

と聞いた。

「はい。そこが痛いです」

賢は亜希子が痛いという場所に2分ほど手のひらを大きく広げて当てていた。そして、人差し指の腹であれば骨に沿って軽く押してみた。自分の意識が分散して欲望に流れないように、亜希子の苦痛を和らげることに集中させた。亜希子は両手で顔を覆って眼を瞑っていた。どうやら、背中の一部を打っただけのようであった。

「大丈夫だよ。でも念のため、明日もし痛みが引かないようだったら病院に行こう。飛行機は予約を遅い時間に変更しよう。明日の朝、お母さんに電話するといいよ」

そう言いながら、賢は亜希子の背中から手を抜いた。そして、浴衣の襟を元に戻してやった。

「ごめんね。疲れているのにワインを飲ませた俺が悪かった」

亜希子は顔を上げると振り返った。亜希子は振り返ったときに少し痛みが走ったような気がしたが、痛みは賢が来る前よりずっと軽くなったよ

うに思えた。亜希子の瞳に涙が滲んできた。

「ごめんなさい。足手まといになってしまって」

「いいんだよ。君のおかげで、ずいぶんスムーズに進んでいるよ。それに君とも同じ体験ができたし」

一筋の涙が亜希子の頬を伝わって流れた。賢は亜希子の肩を軽く支えながら、床を広げて亜希子を寝かせ、掛け布団を掛けて顔にかかった髪をそっと分けてやった。

「今夜痛みが遠のいてくれるといいな。気分は大丈夫か？」

亜希子は軽く頷いた。

「おやすみ」

賢は照明を消すと、内側からロックを掛けて扉を閉め、外に出てドアのロックを確認した。部屋に戻ると賢は祐子に電話を掛けた。祐子は電話を待っていたようだった。賢は今日の出来事をかい摘んで説明した。祐子は亜希子のことが気になるようだった。亜希子が怪我をしたことより、賢が亜希子の面倒を看ていると聞くと頭が熱くなるのを感じた。

「それで、亜希子さんの怪我はどの程度なの？飛行機に乗っても大丈夫かしら？」

「明日具合が悪いようだったら、病院に連れて行こうと思っているんだ。フライトも午後の便に変えるように言ったよ」

流石に祐子は嫉妬心を現すことはなかったが、激しい焦燥感に駆られた。祐子は昨日賢の電話を受けてから、ずっと心が波立っていた。今日は朝直ぐに、課長に3日間の休暇申請を出した。どうして急に3日も休むのかと執拗に訪ねられた。嘘は吐きたくなかったが、やむを得ないと思った。

「親友が旅行先で怪我をしちゃいまして、私が駆け付けなくちゃならなくなりました」

課長はやや不信感を見せて

「どうして君が行かなくちゃならないんだ」

と言った。

「ご両親が外国に住んでいらして、一人きりなんです」

「君が頼りって訳か。まあ仕方ないな。今回だけ特別だぞ」

課長は渋々認めた。祐子は全部嘘じゃないと考えて、自分を納得させた。確かに賢の両親はアメリカに住んでいる。課長は親友という言葉で女性をイメージしたようで助かったが、旅行先の親友に会いに行くことも確かだ。ただ一つ違っているのは、賢は元気だということだ。賢が電話を切ると祐子は直ぐに旅行の支度に取り掛った。既にフライトは確保した。残念ながら朝の便は取れなかった。午後の便にせざるを得なかった。祐子は賢を驚かせようと思った。そして、なんとか亜希子を賢から遠ざけようとも考えた。その夜はなかなか寝付けなかった。賢は受話器を置くと、吸い込まれるように床に身を投げた。翌朝賢は身支度を調べると、急いで亜希子の部屋に行った。亜希子も既に起きていて直ぐにドアを開けた。

「おはようございます。昨日はありがとうございました」

「どうだ、具合は？」

「もうすっかり大丈夫です。どうぞ中にお入りください」

部屋はきちんと片付いていて、帰り支度ができていた。亜希子は臙脂のブラウスに紺のスカートを着いていて、首に昨日と同じ金のネックレスをしていた。

「本当に不思議なくらい痛みがありません。もう完全に大丈夫です。今朝家に電話しました。そしたら、華道の先生が大分回復してきて、もう普通に歩けるようになったようなのです。どうやら軽い腸閉塞のようで、もう一日病院で休養したら退院するとのことなんです。ですから、お見舞いのために今日急いで帰らなくてもよいとのこと、さきほど飛行機をキャンセル致しました。また、お供させてもらってもよろしいですか？」

賢は亜希子の肩にそっと手を掛け、右手で昨日痛めた辺りを軽く摩った。

「痛みはないか？」

「はい」

「そうか、大丈夫そうだな。打ち身だけだったようだな。病院には行かなくても大丈夫そうだ。よかった」

賢は一呼吸して、

「今日も一緒に行動しよう。まずは朝食だな。一緒に下りようか？」

「はい」

亜希子は嬉しさを押さえきれずにいるようだった。賢が一旦部屋に戻り、身の周りの整理をして、鍵を掛けて振り向くと、そこに亜希子が待っていた。賢は亜希子の瞳を見つめながら、労りながら促すように右手を出した。亜希子は賢の手のひらに自分の左手を任せた。賢は軽く亜希子の手を引いてレストランに向かった。亜希子の鼓動は自ずと高まっていた。レストランには、まだ2組のカップルが食事の席に着いているだけだった。ここで朝食を摂る予定の宿泊客の食事は既に用意されていた。ふたりの姿を見て仲居がおひつと味噌汁を持って来た。賢は亜希子の箸の進め方を注意していたが、いつものような生き生きとしたしぐさにほっとした。朝食を済ますとふたりはチェックアウトをするためにロビーに下り、それぞれ自分のクレジットカードで支払いを済ませた。チェックアウトが終わると賢は亜希子に確認した。

「亜希子さん、いろいろあったけど、結局今晚も宿泊できるんだな？」

「はい、許して頂ければ最後まで内観さんと一緒に行動したいと思います。勿論、宿泊もできましたら一緒にの宿で」

そう言うと、少し伏し目がちになり顔を赤らめた。

「分かった。じゃ、今から旅館の予約をした方がいい」

賢はセカンドバッグから旅程を記載してあるメモ用紙を取り出して亜希子に渡した。

「少し待っていてくださいますか？予約しますので」

そう言うと、亜希子は人の少ないロビーの奥に行き。ハンドバッグからスマホを取り出すと、メモ用紙を見ながら電話を掛けた。何度も電話を掛け直しているようだった。やがて10分ほどして、亜希子が戻って来た。

「お待たせして済みません。今の時期はそれほど混雑していないのでしょうか。宿は全部取れました。全部内観さんと一緒にの宿です」

「えっ！全部予約できたのか？運がいいな。ところで、君と一緒に動く

んで今日からレンタカーを借りることにしたんだ。折角だから一寸行動範囲を広げてみようと思ってね」

元もと賢は自動車で移動するのは好きな方ではない。初日からレンタカーを借りることも考えたが、出雲の地は可能な限り歩いてみたかったのだ。宿の接待係がレンタカーが来たことを告げにやって来た。賢はふたりの荷物をトランクに納め、助手席のドアを開けて亜希子を乗せてから運転席に周って乗った。ふたりは麦わら帽子を手にしていたが、賢は亜希子からそれを受け取ると二つを重ねて手に持ち、身体をくねらせそれを後部座席に置いた。亜希子もそれを覗き込んだ。賢が元の姿勢に戻ろうとしたとき、賢の顔が亜希子の顔に接近し今にもぶつかりそうになって、一瞬ふたりは見つめ合った。賢は亜希子の瞳が深く澄み切っていることを一瞬にして感じ取った。そして、それと同時に意識が吸い込まれてゆくような感覚を覚えた。亜希子は直ぐ目を逸らせ顔を紅潮させた。賢は目をしばたたき意識をはっきりさせた。

「いま、亜希子さんに吸い込まれそうになったよ」

「えっ！わたくしはいま、内観さんがぐーんと迫って来るような感じがして思わず目を伏せました」

「俺たち、こういう状態に陥りやすいな」

「不思議な感覚ですね」

賢はエンジンを掛けた。エンジン音もあまりしない静かな自動車だった。宿の接待係が二人外に出て見送ってくれた。賢はそこからは運転に集中した。先ず宍道湖を左手に見ながら国道9号線を暫く走ってから、431号、260号と乗り継いで、海中を通り抜ける338号線に入った。そこは以前アメリカに住んでいた時に訪れたニューオーリンズのミシシッピ川下流に張り巡らされた、沼地の上を走るハイウェイを彷彿とさせた。自然の中を疾駆しているという感じより、作られた構造物の上を孤独に走り続けるイメージが戻ってきた。暫くして大根島の植物園に着いた。駐車場に車を駐めると先ず自分が降り、助手席に周わってドアを開け亜希子の手を取って降りるのを補助した。

「こんなに優しくして頂いていいのかしら」

「アメリカにいた頃を一寸思い出してね」

「えっ！アメリカにいらっしやったのですか？」

「学生の頃、フェニックスの大学に席を置いていたことがあるんだ。ぼろ車で、随分あちこち廻ったものさ。ぼろでも女性を乗せたときは、レディーファーストのマナーを真似ていたんだ。最近のアメリカじゃそうでもないようだけどね。その頃に、この間紹介した数馬とも知り合ったんだ」

「そうだったんですか」

賢は植物園の前を抜けて二人分の入場券を購入し、1枚を亜希子に渡して由志園に入った。美しく造形された日本庭園だった。亜希子が以前両親と一緒に山陰旅行をした時は出雲大社と宍道湖、それに足立美術館を訪れただけだった。どうしてこんなところに、こんな庭園を造ったのだろうかと思議に思った。

「江川さんはここには来たはずだ。ここでツアー仲間と撮った集合写真には写っていたんだ、その後大山の山中で消えたようだ」

ふたりは庭園をゆっくり廻った。庭園の中は樹木が日陰を作っていて、暑さに涼味を添えていた。人影はほとんどなかった。

「内観さん、手を繋いでもいいですか？」

賢は黙って、左手を出して亜希子の右手を握った。

「わたくし・・・賢さんって呼んでもいいですか？」

賢は「うん」と言って頷いた。ふたりはゆっくり歩いた。庭の中ほどにある池を横切る飛び石を渡るときは賢が先に渡り切り、亜希子の渡って来るのを見守っていた。亜希子は可愛らしくびよんびよんと石から石に飛んで、渡り切る時に賢に右手を預けて賢の胸に向かって飛び込んで来た。賢が亜希子を受け止め、ふたりで顔を見合わせて会釈を交わした。賢の目には亜希子の姿が幼子のように映った。ふと祐子のイメージが頭に浮かんだ。祐子も子供のように可愛らしかったが、同時に大人の雰囲気も持っていた。亜希子は大人のように落ち着いていたが、子供のようなあどけなさを見せていた。賢は一本の赤松の下に来た時、不意に足を止めた。一陣の風が吹き抜けるのを感じ、同時に何か強く迫り来るもの

を意識した。亜希子もそれに気付いた。亜希子は賢の手を強く握り身を賢に寄せた。遊歩道は赤松をぐるりと周わるような形になっていた。遊歩道の反対側の木陰から一人の男が現れた。身なりは観光客のようで、手に旅行用のセカンドバッグを持っている。男はふたりに近づくとそのままふたりの横を通り過ぎた。亜希子はほっとして賢の顔を見た。と、その時、男は急に振り向くと手にした小刀で賢に斬り付けてきた。賢は不意に右半身になり、左手で亜希子を庇いながら右手でその男の右腕をつかもうとした。しかしうまく捕まえられず、ナイフの刃先が右腕の内側を斬った。血が流れた。賢は素早く身を躲し、亜希子を離すと、左手で男の右手首を掴んで地面に押さえつけようとした。男は賢の右手に切り付けた時に前のめりになっていたの、賢は空かさず足で男の足をはらった。男はそのまま倒れ込んで直ぐに身を起こそうとしたが、賢は肘で男の後頭部を突いた。男は再び身体を地面に打ち付けた。賢は男が怯んでいるうちに男の手の甲を靴で蹴り、ナイフを振り落とした。ナイフは亜希子の足下にまで滑ってきた。突如亜希子の横に黒いスーツを着た男が現れてそのナイフを取り上げた。亜希子はその男から素早く身を引いた。しかし黒いスーツの男はナイフを手にするのとサッと姿を消した。賢は男を押さえ込んだ。

「いたたた、貴様、俺の息子を見殺しにしがって！」

男は叫んでナイフを探したが、見当たらないのでそのままその場にへたり込んだ。

「おまえ、人違いじゃないのか？」

「いてて、いいやおめえだ。俺は忘れちゃいねえ」

賢ははっとした。賢の右腕からは血が流れ出していた。亜希子はバッグからハンカチを取り出すと、男を押さえ込んでいる賢に駆け寄り右腕にハンカチを巻き付けて縛った。出血は止まった。

「おめえが余計なことさえしなけりゃ、息子はあんな身体にならずに済んだんだ」

「あの時は、ああするしかなかったんだ。反射的にハンドルを切ったんだ」

賢はその情景を眼前に見ながら言った。それは賢が丹波の山道を車で走っている時だった。山肌に沿った道で片側が崖になっていた。賢は崖側の登り車線を走っていた。山肌に沿って10人ほどの登山グループが登っていたが、賢がそれを追い越した時、その中の一人が持っていた杖を車道に落としてしまった。それを拾ってあげようとして2人の登山者が対向車線の車道に出た。その先は右への急カーブになっていて、賢はそのことに気付くとほとんど同時に急カーブを曲がる為にハンドルを切っていた。賢は時速30キロ程度のスピードで登っていた。すると対向車線から1台の車が走って来るのが見えた。賢は危険を知らせようとクラクションを鳴らし続けた。対向車は急ブレーキを駆けた。対向車のスピードが落ちたと思った瞬間、その背後からものすごいスピードで、減速した対向車を追い越して賢の走っている車線に黒い乗用車が入って来た。賢は咄嗟に対向車の車線側にハンドルを切った。急ブレーキを駆けていた対向車は辛うじて停止できた。賢の車は対向車線側の山肌に突っ込んで停止した。しかし追い越して来た車はハンドルを崖側に切って急ブレーキを掛けたが止まることができず、そのまま崖下に転落した。その時崖下に落ちて半身不随になった青年の父親だと分かった。あのときハンドルを切らずにそのままブレーキを踏み続けていれば、その青年の車は自分の車と正面衝突をするか、あるいはうまく行けば追い越し切ることができて、急ブレーキを駆けた対向車の前に入ることもできたかも知れなかった。しかし、その青年の車は下り坂で猛スピードを出していた。さらに悪いことに急カーブの先には登山者が車道に出ていた。もし、急カーブを曲がり切れれば間違いなく登山者を撥ねていたはずであった。賢は咄嗟にそんなことを考えたわけではなかった。ただ反射的にハンドルを切ったのだった。事故が起きた後、自分の瞬時の判断が正しかったことを確認した。その後警察の検証があつて、事故当事者の証言からこの追い越しを掛けた青年一人が誤りを犯したことになり、青年は任意保険にも入っていなかったため保険金が下りず、その上父親に対し事後処理の費用請求がされたと聞いていた。賢は青年を見舞うべく入院先の病院を訪れたが、父親に拒否された。それどころか、その場で罵詈雑言を

浴びせられ、花瓶の生花を引き抜いて顔にたたきつけられた。賢は黙って立ち去った。賢はその時の父親の顔をありありと思い出した。ここにいる男だった。

「おまえが逆にハンドルを切らなきゃ、息子はこんな姿にならなかったんだ」

「・・・・・・・・」

「あの事故で、俺の人生は地獄になった」

賢は男を哀れに思った。

「こんなことになって済まない」

「最初から謝れってんだよ！馬鹿野郎、おめえなんか死にゃよかったんだ！」

男は涙声になって怒鳴った。賢は事件の内容には一切触れなかった。自分の心に歪みがあったのだと思った。騒ぎを聞き付けて、数人の観光客が集まって来た。男は賢の手を振り切って立ち上がると急いでその場から立ち去った。賢の背後に隠れるようにして事態を見守っていた亜希子が言った。

「賢さん、大丈夫ですか？傷の手当をしなくちゃ」

「ありがとう」

賢の右手を縛ったハンカチは血で赤く染まっていた。亜希子はハンカチの結び目をそっと解いた。傷は10センチ近くに渡っていたがそれほど深傷ではないようだった。血はすでに凝固し掛かっていた。公園の管理員が救急箱を持って走って来た。

「大丈夫ですか？お怪我はどこですか？いま犯人を捕まえるように警察に電話しました」

「いや、見逃してやってください。彼も苦しんでいるんです」

「でも、お客さん、こんなに切られちゃって」

そう言いながら、消毒薬を傷口に塗った。賢は痛さに身震いした。白い泡が傷口を覆い直ぐに消えた。管理員はマーキュロを塗ってから包帯を巻いた。

「お世話になります。ありがとうございました」

「あの男のナイフは何処にありますか？」

亜希子が応えた。

「黒い背広を着た男の人が持ってゆきました」

管理員は救急箱を片付けてから、

「一寸事務所までお出で頂けますか？」

と言って、ふたりを管理室に連れて行った。集まっていた野次馬はがやがやと話ながら四散した。管理員が病院に行くよう奨めたが、賢は傷が浅いからという理由で断った。管理室でふたりは出来事の顛末を詳細に説明しなければならなかった。ナイフは黒背広の男が管理室に置いて行ったとのことだった。1時間ほどしてふたりは解放された。亜希子は「さっきの黒背広の男は一体何者なのだろう」と思った。管理上も責任があるということで、お詫びの印として付属施設の2階にあるレストランで昼食が振る舞われた。ふたりは辞退しようとしたが、押し切られてやむなく受けることにした。食事をしながら亜希子が賢に訪ねた。

「あの方はどうしてあなたを傷つけようとしたのでしょうか？」

「4年ほど前に山道で3台の車が関係した事故があったんだ。俺もそのうちの1台を運転していたんだ。あの人はその時、その3台の内の1台に乗っていて半身不随になった青年の父親なんだ」

「半身不随になってしまった息子さんと賢さんはどういう関係なのですか？」

「俺の車と正面衝突をしそうになったのがその青年なんだ。彼はハンドルを崖側に切ってしまったんだ。俺は山側に切ったんで助かったけど」

「それで賢さんを逆恨みしているのですね」

「夢を託していた息子が二度と立ち上がれない身になってしまった苦しきから抜け出せていないんだ。可哀想な人だ。まだ心の傷が癒えるには時間が掛かりそうだ」

賢は詳しい話は避けた。ふたりが食事を済ませて階段を降りると、1階の土産物店で1枚の女性向けのハンカチを買った。

「亜希子さん、ハンカチをだめにしてしまって、ごめん」

そう言いながら、買ったハンカチを亜希子に渡した。亜希子は「いいの

に」といいながらも微笑みを浮かべ、嬉しそうに受け取った。ふたりは江川が集合写真を撮った場所に行った。そこにはほんの僅かな痕跡も、意識の残渣も残っていなかった。

「亜希子さん、この近くにV E A S 館という存在物の仮想体験ができる場所があるんだけど、行って見ないか？実はそこに行くのも今回の旅行の目的の一つになっていたんだ」

「はい、どこでも賢さんに附いて行きます。初めて聞く名前ですけど、どんな体験ができるのですか？」

「このV E A S 館は植物かまたは石になった自分を感じることができるんだ。初めての時は対象物全体ではなくて、部分を体験すると認識し易いそうだ」

「ワクワクしてきます。連れて行ってくださいますか？」

「よし、これから行ってみよう。どんなシステムかも気になるし」

賢は亜希子をエスコートして助手席に乗せた。運転席のドアを開くときについ右腕を使ってしまい、傷にずきずきとした痛みが走って包帯に薄赤い線が浮き出てきた。少し腕を庇う動作をしながら乗り込んだ。亜希子はそれを見逃さなかった。

「賢さん、傷が痛みますか？」

亜希子は身を乗り出して賢の右腕を覗き込んだ。亜希子の洗い髪の香りが賢の鼻をくすぐった。

「少しズキズキするけど心配いらないよ」

賢はエンジンをかけて車を出した。1時半を過ぎていた。元来た道を走り、大根島を出て国道9号線にぶつかると道を左に取った。暫く行くと足立美術館方面への案内板が出てきた。そこを右に折れるとそのまま180号線に入った。急に田園風景が広がった。暫く行くと左手に大きく青い文字でV E A S と書いた看板が見えた。その看板の奥に通じる道があり、その先にグレーで変哲のない直方体の建物が立っていた。賢はV E A S 館の駐車場に車を停めた。亜希子は賢がエスコートする前に直ぐに自分で車を降りた。

「どうした。エスコートしてあげるのに」

「賢さん、怪我をされていて痛いでしょう。わたくしは大丈夫ですから」
賢は左手で亜希子の手を引いて、VEAS館の入り口に設けてある健康診断と書いた入り口に入った。世界で初めて、存在物について意識体験の試みが行われた。それがVEASという仕組みである。VEASとはバーチャル・エグジステンス・アニメイティブ・シミュレーションの略で、仮想存在体験と呼ばれていた。VEASでは何種類かの存在物の体験ができた。この島根県のVEASスタジオには仮想植物体験と仮想岩石体験の2種類が用意されていた。このVEAS館がオープンした当初は連日大勢の入場者で賑わった。予約無しでは当日の入場は難しい程だった。現在はオープンから3年半が経過して、当日訪れても30分待ち程度で体験をすることができるようになった。この数年でコンピュータの演算スピードが飛躍的に伸び、ソフトウェアの革新も進んで、1台のパソコンに繋げたカメラで、一人の人間の顔写真を撮影すると1分以内に日本中の人の顔写真データベースから特定の個人の顔写真を識別出来るほどになっている。記憶装置の容量と情報アクセスのスピードも立体マトリクス共振メモリと呼ばれる原理の採用で飛躍的に伸び、最近では1000テラバイトの半導体メモリを搭載し、ホログラフィの原理を使った立体画像を表示できるパソコンが普通に販売されるようになって来た。このVEASシステムもそれらの技術を駆使して作られていた。VEAS館に入るには、簡単な健康診断が必要だった。ほとんど問診で済んだが、精神的に不安定と認められた人や心臓や脳に障害を持つ場合は詳細な検査を受ける必要があり、不相当と判断されると入場を断られた。チケット販売所で自分が仮想体験したい対象を選択する。この館では50種類の植物と30種類の岩石の中から好きなものを選ぶことができた。この日は入館客が少なく、健康診断を待ち時間無しに受けることができた。問診で賢は腕の傷について聞かれたが、特に入館に支障はなく精神的な安定性が高いと判断されてパスした。亜希子も3問の質問を受け問題なくパスした。ふたりはチケット売り場に行った。

「植物の体験をしてみようか？」

賢が言った。

「わたくしはよく分かりませんが、岩石よりは植物の方が・・・」
賢は植物のチケットを2枚買って中に入った。入り口を入ると植物コースと岩石コースの二つのエントランスが有り、ふたりは植物コースのエントランスを入った。少し進むと更に5つの分岐があり、係の男性が進路の説明をしていた。壁にはその男性の話している内容を図入りで説明した案内板があった。ふたりは壁の案内板を読んだ。

「亜希子さん、どれがいいかな？全体、根、茎、葉、花、植物のどの部分を体験するかだけど」

賢は案内板を読みながら言った。

「わたくし、花を体験してみたいです」

「そうか、亜希さんは華道を習っているんだったな。よし、花のコースに行ってみよう」

ふたりは花の体験と書いてあるペアボックスシートに近付いた。シートは男性用と女性用に分かれていた。賢と亜希子はそれぞれのシートに座った。座席の前には50インチサイズのスクリーンがあり、その下は幅15センチ程度の台になっていた。その台の上にヘッドフォン2個と3次元グラスと書いてある固定した箱があり、その箱を開けるとプラスチック製の眼鏡が2つ入っていた。台の中央に直径5センチほどもある緑色のスタートボタンと赤色のストップボタンが設けられており、その下に簡単な説明書きが貼り付けてある。説明書には10種類の花の写真と番号が書かれていた。説明書の横には0から9までのボタンの付いたキーボックスが設けられていて、該当数字のボタンを押すと好きな花を選べるようになっていた。賢はヘッドフォンとグラスを一つずつ取り、先ず亜希子に渡してから自分も取って身に付けた。亜希子は賢から受け取った装備を身に付けると、賢の方を振り向いた。賢は黙って説明書を指さした。亜希子は少しの間それを眺めていたが、4番の桜を指さした。賢は右手の親指と人差し指でOKの丸を作った。亜希子は神妙になって頷いた。賢は4番のキーを押してからスタートボタンを押した。ヘッドフォンを通して水の流れるような音がしてきた。その音が暫く続き、水の中に居るような気分になってきた。やがて女性の静かな美しい声で説

明が始まった。

「ようこそ桜の花の世界にお越しくださいました。これから暫くの間、あなたは1本の雄蕊おしべになって頂き、あなたのお連れの方は雌蕊めしべになって頂きます。自分の意識を集中して雄蕊に成り切ってください。花が蕾の時、あなたはエネルギーを供給してくれる樹液を受けて、次第に大きく成長してゆきます。時期が来るとポツと音を立てて、花びらが開きます。あなたは今にもはち切れそうな身体を大きく伸ばしてゆきます。あなたは、自分の身体から出る花粉を喜びのうちに身体全体に表現します。花粉は滴のようにあなたの身体からしみ出てきて、次第にカプセルに包まれてゆきます。あなたの仲間達と一緒に大きく羽を広げたように伸びてゆきます。大きく成長したあなたは花粉をまき散らす時を待ちます。風が吹くと、あなたの身体から花粉が飛び散ります。ミツバチが来るとあなたの身体はミツバチの羽に触れ、花粉が身体から離れてミツバチの身体や羽にくっつきます。この花粉が雌蕊に届くことを祈ってください。あなたのいるこの花だけではありません。どこの雌蕊に届くか分かりません。あなたは風を待ち、蜜蜂を待ってください。やがて、雌蕊があなたたちから送られて来た花粉を受けて、生命の信号を受け取ります。このとき花全体が歓喜に包まれます。花粉は雌蕊からの樹液を受け、カプセルが剥がれ落ちます。その剥がれ落ちた花粉の本体は大きな球体に包まれます。花が一番美しくなるときです。やがて雌蕊は花粉を取り込み、内側に向いて収縮し始めます。雌蕊に付いている子房はゆっくり曲線美を表現して膨らんでゆきます。子房の中にあなたの生命と雌蕊の生命の証を作ってゆきます。それが種子です。子房は種子を抱いて大きく膨れてゆきます。あなたはそれを見守り、祈るだけです。やがて、花卉がくは萼から離れて落ちてゆきます。子房は時間を掛けてゆっくり大きくなってゆきます。幹から送り届けられる養分に満ちた樹液を受けて、子房はあなたや雌蕊よりずっと大きく堅くなってゆきます。それは歓喜の後に訪れる創造の儀式です。新しい生命が生まれてゆくのです。あなたと、雌蕊は共に元りんの凜とした姿を失い、次第に朽ちてゆきます。しかし、あなたの命は今、子房の中の種子として生き始めています。やがてあなたは

枯れてゆきます。あなたは子房の大きくなった姿である果実に押し潰されて、喜びのうちに朽ち果てます。さあ、もう一度、自分が雄蕊であることを強く意識してください。これからあなたが朽ち果てるまでの間、心を空しくしてください」

説明が終わると50インチのスクリーンにデフォルメされた水の流れが映し出された。賢は自分が雄蕊であることを受け入れた。水は次第に透明で光り輝く結晶のような形をしたものを含む流れとなってきた。その流れが自分に向かって来て、自分の中に入って来た。いくつかの結晶のようなものはお互いに繋がりあって、クリーム色の壁が出来てきた。壁の中に水が結晶のようなものを押し込んでくる。それらが砕けて溶け、自分の身体を作ってゆくのが分かった。やがて一本の軸が出来あがり、その先に、真ん中から二つに割れた黄色の膨らみが出来てきた。その膨らみが大きく堅く出来上がると、回りのものに押されて動けなくなった。やがて寒気が襲って来た。実際に身体が冷たくなるのを感じた。5分間ほど寒気の中に置かれたあと、急に暖気を感じ始めた。暖気はだんだん広がってきた。その時「ポッ」という音がして、急に押しつけられていた身体が解放され始めた。開放感と喜びが外に押し出されて行った。花が開き始めたのだ。先端の膨らみから、樹液に押し出されるように花粉になる液がしみ出してきた。そのしみ出してきた液は外に出ると直ぐにふわふわした粉粒に変わった。そしてその粉粒の周りが次第に堅い被服に変わっていった。気が付くと少し離れたところに雌蕊がその先端に自分よりずっと大きな丸い台を乗せて立っていた。あの台に何とかして届きたいという意識が強くなって来た。今や身体は自由であった。自分はその限り沢山の花粉を先端の膨らみに乗せて、ただしっかり立っている。一陣の風が吹いてきた。幾つかの花粉が飛び出して行った。花粉が何処に行ったかは分からなかった。暫くしてまた風が吹いた。今度は自分の身体が大きく揺れるのが分かった。花粉を沢山撒き散らすことができた。直ぐに大きな恍惚感の波が押し寄せて来た。その波は先に見えている雌蕊から来ていることが分かった。どうやら恍惚感に包まれているのは自分だけではなかった。他の仲間も同時に恍惚感に包まれていた。

いや、この花全体が歓喜に酔ったようになっていた。雌蕊が受粉した証だった。暫く恍惚感に浸っていると、それから暗闇、明るい光の中と5回繰り返しの経過を感じ、やがて一陣の風が吹き、1枚の花びらがポキッと音を立てて萼から離れた。残りの花びらも次々に散って行った。後には自分を含む雄蕊達と、真ん中の雌蕊だけが残った。雌蕊は下側に向けて収縮しているようだった。雌蕊の下は子房に繋がっている。時間が経つと次第に子房が膨らんできた。子房の中心には自分たちの生命が宿っていることが分かった。すべての雄蕊が歓喜に酔っている様子が分かった。子房は次第に大きくなり、周りが黄緑色に変わってきた。ふと、歓喜の波が外側から次々に届いてくるのが感じられた。まるで、海の岸边に押し寄せる波のようだった。それは取りも直さず、他の桜の花が受粉しているときの喜びの波だった。やがて子房が丸くなり、色が薄紅色に変わってきた。既に自分が黒く変色し始めているのが分かった。不思議なのは自分の身体が黒く枯れたのに、依然として生きて、喜びに満ちていることだった。脈打つ感じは無くなったが、自分が桜の木全体であるという感覚が強く感じられてきた。その時、また、水の映像が画面に映し出され、暫くその流れる音が続いてから、優しい女性の声が聞こえてきた。

「さあ、今あなたは桜の花の雄蕊から命をサクランボの種の中に移し、自ら桜の木に立ち返って来ました。これから次第に元の人間に戻ります。時間を掛けて、このVEASのブースに入って来た自分を思い浮かべ、自分に戻ってください……」

それから3分間ほどモーツァルトのピアノ協奏曲第21番第2楽章が流れフェードアウトした。賢は深く深呼吸して、3次元グラスとヘッドフォンを外し元の位置に戻した。それより少し遅れて、亜希子も装置を元に戻した。およそ2時間が経っていた。亜希子の目が潤んでいた。賢は立ち上がり、亜希子に自分の左手を差し出した。亜希子はその上に右手を重ねて立ち上がった。

「どうだった？」

「わたくし、花の生きているのを感じました。最後の子房に生命が誕生

するときは、本当に自分の身体が熱くなってきて感動に打ち震えました。
わたくし、女性に生まれて本当によかったと思います」

ふたりはV E A S館を出た。時間は5時を回っていた。

「今日はここまでにしよう。一寸ハプニングがあったけど、面白かったな」

「先ほどの桜の花の仮想体験は素晴らしかったです。花に対する見方が変わりました」

「そうだな。俺たちはいろいろ見ているようで、実は本質を見てないんだな。俺もこの体験を楽しめたよ」

少し走ると左手に足立美術館が見えてきた。旅館はその反対側の一角にあった。賢は旅館の前の駐車場に車を着けた。エンジンを切ると、また亜希子が素早く下りた。賢は微笑みながらトランクのロックを外し、ゆっくり下りた。賢は右手をトランクの縁に充てて押し上げながら、左手で亜希子のスーツケースと自分のスーツケースを降ろし、右手を外して左手でトランクを閉めた。まだ右手を庇っている様子が亜希子にはよく分かった。賢は後部座席から二つの麦わら帽子を取り、一つを亜希子の頭にそっと被せてやってから自分も被った。賢は車をロックし、旅館の入り口を入った。接待係が出迎えてくれた。その時左手から、

「賢くん」

という祐子の声がした。賢は驚いて、声の方を振り向いた。

「祐子、どうしたんだ」

亜希子も驚いて

「祐子さん」

と言った。

「私、我慢できなくて来ちゃった」

そう祐子が言ったとき、亜希子は罪悪感と焦燥感の入り交じった感情に襲われた。

「祐子、ここ取れたのか？」

「うん、さっきチェックインしちゃった。いま、お部屋から出て来て賢くんを待ってたの。その手どうしたの？」

「うん、一寸あって・・・後で話すよ。取りあえずチェックインしよう」
賢は亜希子の方に向き直って話し掛けた。亜希子は複雑な気持ちだった。

「はい」

とだけ返事をして賢の後に従った。賢は203号、亜希子には204号が割り当てられた。亜希子はほっとした。賢は祐子のことが心配だった。祐子を手招きすると、

「部屋は何号室だ？」

と聞いた。

「215号室」

と祐子は応えた。賢はカウンターの女性に

「済みません、215号室の近くに変更して頂けませんか？」

と聞いた。

「申し訳ありません。1室だけでしたら216号室に移動出来ますが。
二部屋はちょっと・・・」

と言って困った顔をした。

「分かりました。それじゃ止むを得ません」

亜希子はその言葉を聞いてうれしかった。祐子は少し嫉妬を覚えた。賢は鍵を2つ受け取ると亜希子に203号室の鍵を渡し、祐子にふたりの部屋の番号を教えた。

「そうだ。今日は俺の部屋で、3人一緒に夕食を摂ろう」

ふたりは頷いた。賢はカウンターの女性にそのことを頼んで、

「じゃ、少し寛いでからこのロビーで落ち合おう。そう、30分後に」

と言った。

「はい」

亜希子は応えたが、祐子は会釈しただけだった。エレベータは無かった。ふたりは荷物を手にして階段を上った。階段には深緑色の絨毯が敷かれていた。手摺は竹で出来ていて、壁掛けや生け花にも日本的なイメージを作り出す工夫が伺えた。途中に広い踊り場が設けてあり、そこから直角に折れていた。階段を上り切るとユーティリティがあり、ガラス板を載せた籐の小テーブルと肘掛けの付いた籐の椅子が二つ置かれてい

た。廊下は比較的明るく、階段と同じ色の絨毯が敷かれている。ユーティリティまで来ると、祐子は分かれて自分の部屋に向かった。祐子の部屋は賢や亜希子の部屋とは反対方向にあった。賢と亜希子はスーツケースを降ろすとそれを引いて少し歩いた。絨毯のおかげで引き摺る音がしない。亜希子はほっとした。賢は亜希子と分かれて部屋に入ると、そのまま荷物を部屋の隅に置いて洗面所で手と顔を洗った。包帯の赤い色は一筋の線から広がってはいなかった。痛みはもうほとんど感じなかった。顔をタオルで拭いタオルをタオル掛けに掛けると、いきなり背後から祐子が抱きついた。

「賢くん、寂しかった」

賢は祐子の方に向き直ると、祐子を抱きしめた。ふたりは激しく口づけを交わした。少し落ち着くと賢は祐子を離そうとした。しかし祐子は再び賢にしがみ付いた。賢はそのまま2分間ほど祐子を抱き締めていた。

「私、気が狂いそうだった。あなたが、亜希子さんと一緒にいると思ったら、もうどうすることもできなくて。頭では分かっているつもりでも、身体がだめなの。全身がカーッととなっちゃって」

祐子が少し落ち着いてきたので、賢はそっと祐子を離して言った。

「心配しなくていいのに」

それ以上言っても無駄だと分かっていた。祐子は再び賢に抱きついた。

「3日間休みもらったの。だから、一緒にいられる」

賢は祐子を強く抱き締めた。

「宿は取れたのか？」

「明日はOKだけど、明後日がキャンセル待ちなの。金曜日でしょ、混んでるみたい」

祐子は賢の包帯にハッと気付いた。

「あなた、手はどうしたの？」

そう言うと、両手で賢の右手を取った。今の急な動きで、また赤い線は両端が太くなってきていた。

「斬られたんだ。俺が4年前に丹波の山中で事故に遭ったのを覚えているか？その事故の時、崖から落ちて半身不随なった青年がいたが、今日

偶然、その青年の父親に巡り逢って、斬り付けられたんだ。宍道湖の東側に中海という内海があるんだけど、そこの真ん中にある大根島の由志園でな」

「それは大変！痛いでしょう。私・・・」

その時、ドアをノックする音がした。賢が洗面所から出ると、祐子は洗面所の扉を閉めてシンクの前に動かないように立った。幸い洗面所の扉は板張りで影が映る心配はなかった。祐子は賢がドアを開ける気配を感じた。ドアの外に亜希子が救急箱と包帯を手にして立っていた。

「賢さん。包帯を交換した方がよろしいと思ひまして、それにもう一度消毒をして、化膿しないようにした方が・・・」

「ありがとう」

「わたくしに包帯を変えさせてください」

「ありがとう。でも、自分でやるよ」

「いいえ、片手ではうまくできませんから、わたくしにさせてください」

「そう、それじゃシャワーを浴びた後で頼めるかな。その時に包帯を変えたほうがいいと思うんだ」

「そうですね。シャワーを浴びるときは包帯を外して、絆創膏を貼った方がいいと思います。・・・この鷲ノ湯は昔から生傷の治癒によく効くと言われているようですから。傷の様子を見て、温泉に浸かるのもいいかと思ひます。でも、取りあえず今、簡単に包帯を巻き直しておきます。お湯には時間を置いて食事の後ででも浸かった方がよいと思ひます」

亜希子は救急箱と包帯の袋を入り口の床に置くと、立ったまま賢の右手をとって包帯を静かに外した。包帯は3重ほどに巻かれていたが、傷口に当たっている辺りが赤く傷に癒着して外し難かった。亜希子はゆっくり外した。最後に傷が現れるとき、傷の両端部から少し出血したが、傷口は全体に渡りほぼ塞がっていた。内出血も無く太い血管は切れていないようだった。傷の両端から出た血が血玉になってきた。亜希子はガーゼで血を拭くと、オキシフルを脱脂綿に含ませて傷口全体に塗った。傷の両端からは白い泡が立った。亜希子はそれをガーゼで拭くと、傷口

に切り傷用の軟膏を塗った。それから傷口にガーゼを当て、固定用の絆創膏で止めてから丁寧に包帯を巻いた。包帯を3重に巻き付けて、固定用の布テープで留めた。由志園で管理員が巻いてくれたよりずっときちんと、しっかり巻き付けられていると賢は思った。亜希子は絆創膏を賢に渡すと、治療の残滓を掻き集めて左手に握り締め、右手に救急箱を持って外に出た。

「ありがとう、亜希子さん」

亜希子は会釈をして扉を閉めた。少し間を置いて、祐子がそっと顔を出した。

「亜希子さんに私の声、聞こえてしまったかしら？」

「いや、今、下で包帯なんかを調達してきてくれたばかりじゃないかな」

「ごめんなさい。わたし、感情に走っちゃって。あなたへの気遣いが足りなかったわ」

祐子は、自分の行動が恥ずかしくなった。亜希子に負けていると思った。しかし、賢への愛情は負けていないと思い返した。3分ほどして、祐子はドアを開け外の人気の無いことを確認して自分の部屋に向かった。それから5分ほどして賢はロビーの休憩所に下りた。ロビーはリニューアルされたばかりのようで、新しい木の香りが心地よかった。窓は全面ガラス張りになっていて、外の様子が手に取るように伺えた。先ほど賢と亜希子が車から降りて近付いて来たとき、亜希子が賢に寄り添うようにしていたのに祐子は苛立ちを覚えた。亜希子が来る前にロビーに降りて、その記憶に意識が行かないように窓を背にしてソファーに腰掛けていた。亜希子の姿はまだ見えなかった。賢は祐子の向かいのソファーに腰掛けながら言った。

「祐子、早いな。由志園という植物園には、江川さんの痕跡は残ってなかったよ。あそこは江川さんが集合写真を撮った場所だから、何かあると思ったんだけどな・・・祐子、あその庭園はなかなか大したものだったよ」

その時、亜希子が姿を現した。

「お待たせしました。賢さん、傷は痛みませんか？」

そう言いながら、亜希子は賢の右隣に座った。

「うん。ありがとう。前より締まっていたいい感じだよ」

「でも、手の怪我で済んでよかったわ。危なかったんでしょ」

「そうなんです。賢さんの動きが機敏だったから、何とか避けることができたけど、意識が集中していなかったら重傷を負っていたと思います」

「彼はきっと、どこかで俺を見つけて後を追跡^つしていたんじゃないかな。気付かなかったけど、亜希子さんにはすっかり迷惑を掛けてしまって。ところで、背中は大丈夫か？」

そう言いながら、賢は亜希子の左側の背に右手を回して、背中を少し押さえた。

「はい、大丈夫です」

「よかった」

祐子の顔つきが強張った。賢が亜希子に優しく接すると、後頭部がカーッと熱くなってくるのを覚えた。しかし祐子はできるだけ冷静さを装った。賢は祐子の方を向いて言った。

「昨日亜希子さん、浴場でころんで打ち身をしてしまったんだ」

「本当にもう大丈夫です。昨日賢さんが打った背中に手を当ててくださってから、不思議に痛みが無くなりました」

祐子が冷静さを装って言った。

「亜希子さんも大変でしたね。でも、今日戻らなくてもよかったんですか？」

「えっ。どうしてですか？」

「急用が出来て東京に戻らなくてはならなかったって、賢さんから聞いたもので」

賢は頷いた。

「あっ、そうです。お花の先生がたおれたって連絡があって、それで。でも、先生の病状は持ち直したようですので、もう戻らなくてもよくなりました」

「明日、明後日と3人で調査^{あさつて}できるから、消滅の真相に迫れるかも知れないな。祐子は地域の民話や情報に詳しいし、亜希子さんは消滅現象の

体験者だし、きっと旨くゆくぞ・・・祐子、今回の旅行で海の老人のことが少し分かってきたんだ」

「えっ、本当？あの“鳥との触れあい大会”に来ていた老人と同じ人だった？」

「そう、あの人だった。言葉にすごい威厳があったな」

「はい、わたくしは思考が止まりました」

「俺もそうだよ。難しいことを教えてもらった。俺たちの認識力が弱すぎるってこと」

「わたくしには、まだ理解できません」

「つまり、いま俺たちが見たり聞いたり感じたりしていることは脳が受け取った情報から作り出しているイメージで、この世界にはまだ脳が認識できていない情報もあるってことを教えてくれたんだ」

「脳が捕らえることができない情報ってなあに？」

祐子が訊いた。

「簡単に言うと次元の違う情報さ」

「そういう情報があるとしたら、脳はどうやってそれを受け取ることができるのかしら」

「俺はその鍵が人のDNAにあるように思う。DNAの90%以上は使われていないって謂うじゃないか。海の老人の言葉と重ねてみると、俺たちがDNAにある入出力インターフェイスのスイッチ、つまりRNAの活動をONすれば、経路が繋がって脳がそういう情報を捕らえることができるんじゃないかと思うんだ。その使われていないDNAの情報の多くが多次元の認識機能に関与しているんじゃないかって思うんだ」

賢は次第に専門的な言葉も使い始めた。

「わたくしには全く理解できません」

亜希子が言った。祐子は賢のことをよく知っているということを亜希子に示したくなった。

「私も分からないわ。でも、賢くんいつも数馬君とこんなこと話しているのよね」

「うん、数馬がいるともっと面白いけどな。まあ簡単に言うと、もっと

真実の世界を知るためには、自分のDNAの情報を伝えるRNAの働きを高めなくちゃだめだってことだ。多次元を観るためには第3の眼を開かなくちゃならない」

祐子が言った。

「それと今度の消滅事件とどう関係するの？」

「つまり、ある人が消えたとするな、その時周りにいる人の脳が、その消えた人を認識できなくなっただけなことじゃないかってことなんだ。ところが消えた方の人から見ると、ただ単に自分のいる世界が広がっていて、今までの世界からちょっとはみ出ただけなんじゃないかと思うんだ。今俺たちが見たり、聞いたり、さわって感じたりしている対象はすべて原子の振動なんだ。だけど、ほとんどの人の脳はある振動状態のものしか認識できないと思うんだ。人間が光を感じる時可視領域にある光線は見えるけど、可視領域外、例えば赤外線や紫外線は見えないだろう。人間の目にとっては、物は光線の反射光そのものだから、もしその可視領域外の反射光を出していると、ほかの人間には存在が見えなくなるんだ。音も同じさ。可聴領域の音は聞こえるけど、それを出た領域の音は聞こえないんだ。手で触れる感触や存在としての感触も同じ様なものさ。原子と原子の振動が対峙している時は感じるけれど、全く同じ波長の振動となった時は同じ位相なら強く感じ、反対の位相なら全く感じないと思うんだ。これを解く鍵は水と風にあると思う」

「賢くん、全く分からないわ。もう少し現実的な話に戻してよ」

「そうだな、分かった。そろそろ食事にしようか？祐子と亜希子さんはお風呂に入ってからの方がいいかな」

亜希子が応えた。

「わたくしは賢さんがお風呂に入る時に一緒に入ります」

祐子も負けずに言った。

「私も食後にするわ」

3人は先に食事にすることになった。食事までには30分ほど時間があつた。